



第七  
日本立志編

一名脩身箴  
于河岸貫一著述

和装本

9  
3739  
1



第七  
全刻  
于河岸貫一著述





日本立志編

一名脩身鏡鑑  
于河岸貫一著述

和装本

9  
3739  
1



全刻  
卷册

于河岸貫一著述  
日本立志編

第七  
号





千河岸貫一著

曰本立志編

一名脩身規範

板權所有

雙書房合梓

志之所達

榮利不求

東京日報社長福地源一郎先生題辭



門 09  
號 3739  
卷 1

馬玉

東京三月念五

福地源



日本立志編序

凡ノ書ヲ著スルノ要ハ以テ世ヲ益スルニ  
リ以テ物ヲ利スルニアリ以テ人心ヲ改良ス  
ルニアリ以テ風俗ヲ矯正スルニアリ詞章巧  
妙能ク時好ニ應ジ為メニ洛陽ノ紙價ヲ傾ク  
ルノ著書アルモ苟モ世ヲ益シ物ヲ利スルノ  
効ナク却テ風俗ヲ紊リ世弊ヲ培養スルガ如  
キアラハ余ハ秦帝ヲ地下ニ起シテ之ヲ焚カ  
ント欲スルナリ近時書ヲ著スル者多クハ古

昭和十六年一月十一日寄  
尾野實英氏贈

日本立志編序 卷之二 序



俗ノ通弊ヲ逐フテ時好ニ投ズルヲ專務トナシ唯利ヲ射ルヲ目的トスルヨリ著書ニ生ズルノ弊害亦大ナリ豈慨歎ニ勝ユベケンヤ頃日櫻所干河岸君日本立志編ノ著アリ携へ来リテ序ヲ余ニ屬ス余受ケテ而シテ之ヲ讀ムニ我國今古哲人ノ言行以テ世ノ模範トナスベキモノヲ撰録シテ附スルニ論評ヲ以テス其文巧妙其論正當人ヲシテ志ヲ立テシムルニ足ルモノアリ真ニ世ヲ益シ物ヲ利スルノ良

書ト謂フベキナリ且夫レ此書ヲ著スル人ハ即チ日々操觚ニ從事スルノ新聞記者ニシテ其餘力能ク此ニ及ベリ其氣力ノ壯ナル怠惰余ノ如キモノヲシテ亦志ヲ立テシムベシ此書一たび出デハ其世道ヲ補フノ効歎カラザルヲ知ル是レ余ノ辭セズシテ一言ヲ為ス所以ナリ

明治十三年三月僑居於浪華

藤田茂吉撰





Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page.

緒言

曩キニ敬宇中村翁が自助論即チ西國立志編ノ譯アリ其書一タビ出ル人争テ之ヲ購フ其書ヤ看者ヲシテ能ク一讀ノ下ニ剛毅耐忍ノ貴ブベク勉強刻苦ノ重シズベキヲ知リ感發興起スル所アリシム維新以來洋籍ヲ翻譯スル者陸續梓上ボリ汗牛充棟スト雖氏翁ノ自助論ノ如ク流播セシ者少ナシ是他無シスマイルス氏ノ著タル其歸旨ハ專ラ世道人心ニ影響シ有爲ノ志氣ヲ振ヒ自助ノ精神ヲシテ活潑ナラシメントスルニ在リ字々句句々ミナ身ヲ立テ家ヲ興スノ金言格論ニシテ一モ閒話冗語ヲ録セシ者ニアラザルヲ以テナリ若シ唯文章ノ婉麗ナル措辭ノ巧妙ナルヲ以テ空中ニ樓閣ヲ架シ正中奇ヲ出シ有中



無ヲ生ジ、變幻恠奇、以テ一時ノ聲譽ヲ博セントスルモノ  
ノ如キハ假令人々相傳ヘテ之ヲ稱歎シ、洛陽ノ紙價爲メ  
ニ騰貴スルニ及ブモ、天下後世ニ至ルマデ、人ノ之ヲ傳フ  
ル者ニ非ズ、六一居士ノ所謂啼鳥好音ノ耳ヲ過グルニ殊  
ナラザルナリ、是則チ古來文人詩客太ダ多シト雖、氏、鉅匠  
大家其人ニ乏シカラズト雖、其天下後世ニ稱譽セラ  
ルハ、箏瓢自ラ樂ミ、議論文章ノ人ヲ驚カスモノ無キノ  
類回ニ及バザルヲ遠キ所以ナリ、然リト雖、氏、言文ナラザ  
レハ傳ハラズ、亦人心ヲ感發スルニ足ラズ、彼自助論、如  
キ、其著固ヨリ金言格論、其譯語亦穩當正雅ニシテ、又滄、  
婉麗ナル他、譯書ノ間、文意通暢、難キ者アルノ類ト、日  
ヲ同フシテ語ル可キニアラズ、是其書ノ世ニ傳播シテ、久

ク行ハル、所以ナルベシ、

余客年來餘暇アル毎ニ、我邦古來ノ事蹟ヲ諸書中ヨリ抄  
録シ、每章其感觸セル意想ヲ附記シテ論評ニ充ツ、頃積ム  
デ卷ヲ成シ、題シテ日本立志編トイフ、斯書固ヨリ文章字  
句ノ讀者ヲシテ感發セシムルニ足ル者ナク、又世道人心  
ニ裨益スベキ格言ヲ吐クノ學識無ケレバ、唯、古來ノ事蹟  
ヲ記述セルノミ、又彼スマイルス氏ノ自助論トハ、体裁稍  
異ナルナリ、  
彼ノ自助論ハ、人ニナ立志編ト稱スルヲ以テ、斯書亦彼ニ  
鉅釘模擬セシ者ナルベシト思フ人多カラシ、然レ、氏、彼レ  
ハ、古人ノ事蹟ヲ掲ゲザルニハ非レ、天ハ自ラ助クル人  
ヲ助クルノ理ヲ論ズルヲ以テ、通篇ノ脈絡トス、此レハ、每



篇古來人士ノ事蹟ヲ舉ゲテ、以テ軌近ノ人情世態ニ比對  
シテ、評論スルニ止マル。一ハ自助ヲ以テ主論トシ、一ハ忠  
厚ヲ以テ本旨トス。西國立志編ハ、多ク學者工人ノ事蹟ヲ  
引ク。日本立志編ハ、首トシテ孝子節婦忠臣義僕、若クハ明  
君賢臣哲人勇士ノ事蹟ヲ掲ゲ、甲ハ人ヲシテ勉強忍耐、以  
テ身ヲ立テ家ヲ興サシメントスルニ在リ。乙ハ風俗漸ク  
奢靡ニ赴キ、浮華ニ流ル、ノ弊習ヲ矯ル、ノ一端ニ供スル  
ニ在リ。故ニ斯書ヲ立志ト名クル所以ハ、孟子ノ所謂頑夫  
毛蕪ニ惰夫モ志ヲ立ツル云々ノ語ニ根據シ、古來忠厚謹  
愨、耐忍困苦セル人ノ風ヲ聞テ、起ツ者アランヲ庶幾スル  
ノ意ヲ寓ス。名ハ則チ相似タリト雖、臣主義トスル所異同  
アル。此ノ如シ。

人アリ或ハ言ハシ人ノ志氣ヲ獎勵スルニハ、既一自助論  
ノ在ルアリ。何ゾ學藝技術未ダ大ニ開ケザリシ、我邦ノ事  
蹟ニ就テ、云々スルヲ須キニヤト。余以爲、然ラズ。夫レ我  
邦固有ノ忠厚ナル風尚ヲ振起シ、之ニ申サヌルニ、西人が  
忍耐強氣ノ氣風ヲ以テセバ、其富強文明遠ク歐洲諸邦ニ  
凌駕スルノ期スベシ。若シ然ラズニテ、泰西剛毅  
堅忍ノ習俗ヲ學ブ、クニシテ、古來ノ良風美俗タル、忠厚  
易直儉素謹愨等ノ氣象ハ、漸ク地ヲ掃フニ至ラバ、則チ左  
手ニ得テ右手ニ失シ、一步ハ進ミ、一脚ハ退クト、何ゾ殊ナ  
ランヤ、是レ余中村翁ノ譚セル者ト、其体裁ト主義ヲ異別  
シ、日本固有ノ良風美俗ヲ記述スル所以ナリ、庶幾クハ讀  
者ヲシテ、風節ヲ勵マシ、行義ヲ慎マシムルノ一助タラン



一ヲ故ニ一ニ修身規範ト名ケ、今書房ノ需メニ應ジテ、梨  
 棗ニ災スト雖也、其世ニ流傳スルト否トハ、固ヨリ豫期ス  
 ベカラザル所ニシテ、彼自助論ト並ビ行ハル、ノ鈞量ナ  
 キヲ知ル然リト雖也、今世ノ文人學士ガ、動モスレハ間語  
 ヲ綴リ、問書ヲ撰キ、間錢之ヲ購フ者ヲ待ツニ比スレバ、稍  
 優ヤル所無キニ非ルヲ信ズ、刻成ルニ及ビ、卒然筆ニ命ジ  
 テ、本編撰述ノ旨趣ヲ略記シ、以テ緒言ト爲スト云爾。

編者識

日本立志編卷一目次

節儉ノ部

- 節儉ヲ尚グハ修齊治國ノ要務タル事ヲ叙ス 一丁
- 第一 後三條帝ノ聖斷 二丁
  - 第二 源賴義日置九郎ヲ叱責セシ事 四丁
  - 第三 源賴朝筑後守俊兼ヲ戒メシ事 五丁
  - 第四 松下禪尼手ヅカラ亮隔ヲ糊補セシ事 六丁
  - 第五 北條時賴儉素ノ事 六丁
  - 第六 楠正成北條氏ノ亡ブルヲ知ル事 七丁
  - 第七 黒田如水銀百枚ヲ取テザリシ事 八丁
  - 第八 家康公恭儉ナリシ事 十丁
  - 第九 井伊直孝衣ヲ乞フタル事 十三丁



第十 紀州侯頼宣ノ生母粧資ヲ捐テ、士ヲ養フ事

第十一 水戸黄門光國ノ金言 十四丁

第十二 岡野左内貨殖ヲ好ミレ事 十五丁

第十三 備前侯光政挈鞋奴ヲ逐ヒレ事 十七丁

第十四 酒井侯忠清補綴セル袒服ヲ服セシ事 十八丁

第十五 土井利勝零絲ヲ棄ザリレ事 二十丁

第十六 備前侯綱政紙ヲ愛ム事 廿一丁

第十七 家忠公ノ乳媪本多正信ヲ面斥セシ事 廿二丁

第十八 青木民部少輔絹ノ衾褥ヲ謝セシ事 廿四丁

第十九 大河内金兵衛松下信綱ヲ訪フ事 廿五丁

第二十 酒井忠真綿衣ヲ以テ納徴トセシ事 廿五丁

第廿一 酒和田喜六獨斷ヲ以テ金ヲ貸シタル事 廿六丁

第廿二 綾部道弘其子ノ奢侈ニ習フヲ懼レシ事 廿八丁

第廿三 奥貫五平次飢民ヲ賑恤セシ事 三十丁

第廿四 大黒屋善兵衛橋本某ヲ感悟セシメシ事 卅一丁

第廿五 釋月仙貧鄙ノ誚リヲ避ケザリシ事 卅四丁

第廿六 春夫八藏ガ達ナル事 卅六丁

第廿七 狂生田某ヲレテ禍ヲ免カレシメシ事 卅九丁

第廿八 新見屋新右衛門少女ヲ救ヒ禍ヲ免ガレシ事 四十三丁

第廿九 山中某賑恤ヲ以テ老境ヲ慰メタル事 四十七丁

第三十 菊池孝兵衛儉朴ニシテ窮乏ヲ憫ミシ事 同 四十八丁

第卅一 川北梅山儉素自ラ守ル事 四十八丁







四モニ至ルモ猶ホ美酒鮮肴ニ酔飽スルガ如キモノナラ  
ニヤ。必ズ家道ノ以テ此ノ如クスルニ足ルアルニ由テナ  
リシハ推知スベシ。孟子ガ富歲ハ子弟頼多ク凶歲ハ子弟  
暴多シトイヒ邦諺ニモ貧ハ盗ニ下イフガ如ク人ハ其生  
活ノ景狀ニ由テ善良トモナリ暴惡トモナル者ナリ。而シ  
テ其衣食ノ足り仰事俯畜ノ資ニ關乏ヲ訴フルコト無キヲ  
欲セバ各自ノ生業ニ勉カスベキハ勿論ナリト雖モ平生  
ニ節儉ヲ守ラズンバ刻苦焦勞シテ得タル所モ奢侈ノ為  
メニ消散シテ踪形ヲ留メザルノミナラズ遂ニ負債山ヲ  
為スニ至ラン其國ニ於ケルモ亦然リ故ニ富強ト並ベ稱  
シテ國富メバ兵モ亦強ク兵ノ羸弱ナル國ハ必ズ財政ノ  
困難ヲ訴フル者ナリ然レバ則チ家ノ敗興シ國ノ存亡ス

ル所以ハ唯儉素ヲ尚フト否ラザルトニ在ルノミ。斯ク云  
フト雖モ節儉也者ハ吝嗇ト混レ易キモノニテ世上往々  
吝嗇ニ過ギテ子孫ヲ壓抑シ身死シテ幾クモ無ク蕩子ノ  
為ニ耗散セラレ所謂長者三代トイヘル類多ホカラズト  
セズ是正理ニ違ヘル所為ヲ以テ積聚シテ散ズルコトヲ知  
ラズ自ラ怨ミノ府トナルコトヲ省セザルニ由レリ節儉ノ  
美德ト思ヘ知ラズ識ラズ吝嗇ノ禍根ヲ培養スルコトヲ  
其素望ト反對スル結果ヲ収ムルニ至ルベシ察セズンバ  
アル可カラズ語ニ曰ク若有周公之才之美使驕且吝其餘  
不足言也已ト聖人既ニ然リ況ヤ其他ヲヤ

第一 後三條帝ノ聖斷

後三條院天皇ハ剛健嚴明稱シテ英主ト為ス即位ノ初ニ



當リ風俗華侈ニハ下吏ノ車ト雖氏之ヲ飾ルニ金ヲ以テ  
ス帝其弊ヲ矯メント欲其當テ石清水ニ幸ス都人士女出  
テ鹵簿ヲ觀ル車金飾アレバ則チ帝爲ニ輦ヲ駐メ命  
テ盡ク剔去セシム後チ加茂ニ幸ス復タ金飾車ヲ見ズ御  
扇檜柄藍紙ヲ用キ青魚頭ヲ炙リ胡椒ヲ塗リ以テ御膳ニ  
充ツ其儉素此ノ如シ故ニ俗淳樸ニ返リ皇綱再ビ張リ  
群下肅然タリ

櫻所子曰ク古來創業ノ英主守成ノ名臣恭儉ノ徳ヲ修サ  
メ以テ治世安民ノ業ヲ全フセザルハ無シ是則チ欲ヲ縱  
ニシ情ヲ肆ニレ奢侈華麗ヲ競フハ衰敝ノ本ニレテ節儉  
質素ハ興隆ノ基ナルヲ以テナリ故ニ唐ノ太宗ハ儉約朴  
素終始渝ラズト詔リレ魏徵ノ上疏ニモ第一ニ節儉慎刑

ト謂フ要スルニ名主賢臣ノ見ル所中外同軌千古一轍ナ  
ルヲ知ルニ足レリ恭ク惟ミルニ我邦開闢以來萬世一系  
ノ皇統ヲ奉戴シ敢テ非望ヲ企ル者ナキ所以ハ天威  
ノ赫々タル他邦ニ比類ナキヲ以テニアラズヤ而テ其  
天威ノ赫々タルハ則チ皇恩ノ四海ニ浹洽スルモ亦萬  
邦無比ナルヲ以テナリ而メ其威雷霆ノ如ク其恩雨露ノ  
如ク政令教化雲行キ雨施シ君民ノ誼永ク易ハラザル所  
以ハ列聖恭儉ヲ事トシタマフニ由ル之ニ因テ國史記  
スル所歷朝ノ聖蹟ハ每篇漢文ノ紀ヲ讀ムカ如クナリ  
トハ既ニ山陽賴翁ノ謂フ所ノ如シ今謹ムテ延久ノ朝ニ  
於ケル一聖蹟ノミヲ記スルハ國史既ニ詳カニ歷朝ノ  
聖蹟ヲ載セ世人普ネク感仰スル所ナルヲ以テナリ



我が敷聖至仁ナル 今上天皇ハ、夙トニ復古ノ鴻基ヲ建  
 テサセタマフ、其俊德偉烈名クベキ無シ、而シテ太平遊惰  
 ノ習弊ヲ蕩滌シ、尊大驕奢ノ風俗ヲ矯革シ、夫ノ鐵道ヲ新  
 築シ、電線ヲ架設シ、若クハ兵艦ヲ製造スルガ若キ官民ノ  
 便ヲ得、國家ヲ保護スル為メニハ、官帑ヲ傾ケラル、モ東  
 京宮城ノ災スルヨリ、既ニ數年ヲ經ルモ、猶ホ之ガ經營ヲ  
 猶豫シタマヘ、更ニ勤儉ノ 詔ヲ下ダシ、供御ヲ減セラル  
 ルニ至ルモノ、延喜天曆ノ 聖代ト雖、亦此ノ如クナル  
 ニ過ギザルベシ、誰カ感戴シタテマツラザル者アラニヤ  
 然レハ、則チ我が帝國ノ人民タルモノ、宜ク此勤儉ノ 聖  
 旨ヲ奉體シ、質素ヲ本トシ、産業ニ勉カシ、 皇化ノ萬一ヲ  
 裨補シ奉ラザル、ベカラズ、然ルニ都鄙一般ニ、漸ク奢靡ニ

趨クノ弊ニ、深着シ、動モスレバ麗衣鮮食ニ飽煖ヲ取ラン  
 トスルノ急ナルガ為メニ、已レガ分ヲ遺レ、遂ニ産ヲ破、以  
 家ヲ喪ナヒ志操ヲ挫ギ、廉耻ヲ顧ルノ違ナキニ至ル、吁、何  
 ゴ 聖主親カラ衆庶ニ率先シテ、勤儉ヲ事トセラル、ノ  
 敷旨ニ感激スルノ遲鈍ナルヤ、是レ我が古來ノ事跡ニ  
 徵證シ、節儉ヲ尚ブハ、修齊治國ノ要務タル所以ヲ叙述ス  
 ルヲ以テ、斯書ノ首篇ニ措ク所以ナリ、希クハ鄙俚ノ文辭  
 ト雖、亦風化ノ萬一ヲ裨補スル所アラムヲ、  
 美 第二 源賴義日置九郎ヲ叱責セシ事  
 源賴義、奥州ノ役ニ赴キシ時、其軍ニ從ヘル兵ノ中ニ、近江  
 ノ人日置九郎トイヘル者アリ、甲冑其他軍裝太々華美ナ  
 リシカバ、賴義之ヲ視テ色ヲ變ジテ曰ク、憎ムベキ狀貌カ



汝チ必ズ身ヲ亡ボスベシ。速カニ賣却セヨ。ソレモ官軍  
ノ陣營ニ於テスルコト勿レ。敵營ニ賣與スベシト。九郎唯々  
トシテ退ク。他日亦美麗ナル軍装ヲ爲シテ陣頭ニ立ツ。其  
美麗前ニ減ゼズ。頼義怒テ曰ク。汝チ猶ホ身ヲ亡ホス。一ヲ  
曉トウザルヤ。速カニ人ニ賣與セヨ。着スベカラズト。而ノ  
他日黒縮甲ヲ着セリ。甲舊物ニ屬ス。頼義之ヲ視テ喜ベル  
色アリ。曰ク。喜慶喜慶。軍装ヲ美麗ニスルタメニ財ヲ費セ  
バ。家爲メニ貧シク。勇士ヲ養フベキ。資力無ク。敵ニ逢フテ  
亡ビ易キモノナリト。  
櫻所子曰ク。頼義義家多年遠征シ。遂ニ奥羽ヲ平定スルヨ  
リ以來。東國ノ民源氏ヲ仰ダ。父母ノ如シ。而メ其裔孫頼  
朝流鼠ノ身ヲ以テ奮然手ニ唾シテ起シ。東國ノ武士響應

シ。遂ニ諸平ヲ殲ク。覇業ヲ創ムルニ至リシモ。其祖宗  
ノ恩威東國ノ民ニ及ベルノ素アルヲ以テニ非ズ。而メ  
其此ノ如キヲ致ス所以ノ本ヲ原ヌルニ。節儉ヲ事トシテ。  
衣服飲食ヲ非フ。力ノ士ヲ養フタメニ。財ヲ愛マダ  
リレニ由ルヤ必セリ。何トナレバ。其日置九郎ニ告グルノ  
一語ヲ以テスルヒ。何ゾ自家ノ節儉ヲ貴バザルノ理アラ  
ムヤ。又何ゾ其子義家ヲ訓誨スルニ。節儉ヲ主トシ。勇士ヲ  
養フノ事ヲ以テヒケラシヤ。  
第三 源頼朝筑後守俊兼ヲ戒レノ事  
源右府頼朝。或時筑後守俊兼ガ。美麗ナル衣服ヲ服ミテ。政  
廳ニ出タルヲ視。怒ルコト甚シ。即チ起テ俊兼ノ副カヲ執ル。  
其裾ヲ刺シテ曰ク。汝チ常胤千葉介。眞平土肥二郎。視ヨ



彼等ハ武技ニ長ヅタルハニテ文學ニ短ナリト雖氏節  
儉ヲ守ルガユエニ家富ミ多クノ家隷ヲ養フ汝チ俸祿彼  
等ニ比儔スルヲ得ズ而シテ華美ヲ好ク節儉ヲ知ラザル  
ハ則チ財産ヲ使用スル方法ニ暗キニ由ル汝チハ文才ア  
リト雖氏未ダ是非得失ヲ辨ゼザルナト大ニ叱責セラレ  
ケリ爾時滿廳ノ諸士之ヲ聞キ各恐慄シテ措クトコロテ  
知ラザリシ

櫻所子曰ク汝チハ文才アリト雖氏未ダ是非得失ヲ辨ビ  
ザルヤト右府ノ一言以テ其眼光炬ノ如クナルヲ見ルニ  
足レリ若シ源右府ヲシテ今日經濟家ヲ以テ自ラ居リ朝  
夕ニ財本勞カヲ談ジ夕ベニ生殖分配ヲ説キ而シ自身ハ  
量入制出ノ家政ヲ整理スルヲ知ラズ偶得ル所アレバ之

ヲ聲色ノ夕メニ消耗シ道ヲ督スル者門ニ滿ルカ如キ  
視セシメバ將夕之ヲ何トカ謂ハニ

第四 松下禪尼手ツカウ亮隔ヲ糊補セシ事  
松下禪尼ハ安達氏秋田城介景盛ノ女ニシテ北條時頼ノ  
母ナリ嘗テ時頼ノ爲メニ食ヲ設ク禪尼ノ兄城介義景來  
テ經營ス尼方ニ手ツカウ紙ヲ裁シテ亮隔ヲ糊補ス義景  
曰ク請フ人ニ命ジテ之ヲ爲セト尼顧ミズ義景曰ク之ヲ  
補フハ之ヲ新タニスルノ勞ヲ省クニ若カズト尼歎ジテ  
曰ク我レ豈ニ之ヲ知ラザランヤ凡ソ物小損アル早ク之  
ヲ補ヘバ則チ大壞ニ至ラズシテ止ム今此小損改メテ之  
ヲ新タニスルハ奢侈ヲ以テ少年ニ示スナリト義景赧然  
タリ



櫻所子曰ク賢達ノ人或ハ母教ノ然ラレムルアル古來其例ニ之シカラズ即子孟母ノ事ハ言フヲ待タズ晉陶侃宋ノ程伊川ミナ其人ナリ時頼ノ儉素ヲ守リ海内肅トシテ治マリ政務能ク整フ所以ノモノ亦禪尼訓誨ノ然ラレムル所ナリ

第五 北條時頼儉素ノ事

時頼自ラ奉スル儉素食味ヲ貳ス一夕燕居ス族父大佛宣時ノ來ルニ會ス時既ニ深夜時頼一鉢ノ酒ヲ手ニシテ曰ク獨酌卿ト共ニスルハ樂キニ若カズ顧フニ安ゾ下物ヲ得心所ゾ紙燭ヲ照ラシ度ニ索ム碟ニ殘醬アルヲ觀取テ酒ヲ佐久其澹薄此ノ如シ

櫻所子曰ク北條時頼官ハ左近衛將監ニ過ギス位從五位

上ニ過ギスト雖氏六十餘州兵馬ノ權ヲ握ル身ヲ以テ其儉素此ノ如シ殆ンド今ノ人士ヲシテ失笑セント欲セシム是則ク其王室ト親族朋友トニ對スルノ措置ニ於テハ固ヨリ論ズベキ所多シト雖氏其民政ニ於テハ頗ル觀ルベキ者アル所以ニノ公平ヲ旨トシ節儉ヲ事トシ夜々トシテ及バザルガ如クスル北條氏ニ若クハ無シ宜ナリ哉陪臣國命ヲ執ル九世ノ久シキニ及ベルト且ツ夫レ時宗ガ鎌倉ノ執權タルニ當リ文永弘安ノ役アルモ之ガ為ニ帑廩ノ空乏ヲ訴ヘシヲ聞カズ時頼若クハ時宗ヲ尊大驕奢徳川氏ノ季世ノ如クナラレバ其凶滅何ゾ高時アルヲ待タンヤ

第六 楠正成北條氏ノ亡ブルヲ知ル事



北條入道高時ハ宴會アル毎ニ酒九献アレバ、下物九種アルヲ要ス。楠正成之ヲ聞キ人ニ語テ曰ク、北條氏マサニ久シカラズシテ亡フ可シト。

櫻所子曰ク、酒九献、下物九種、今ヨリシテ之ヲ視レバ、尋常平民ト雖、亦驕奢トスル所ニアラズ。況ヤ高時ハ、天下ノ執權ニ非ズヤ、何ゾ太ダ驕侈ナリトセンヤ、然リト雖、松下禪尼ノ自ラ亮隔ヲ糊補シ、第四條ヲ視ヨ、最明寺時頼一鉢ノ酒ヲ酌ムニ、殘醬ヲ以テ下物トシ、第五條ヲ視ヨ、或ハ青砥藤綱ガ、十錢ヲ撈ハシメタル等ヨリ視レバ、九献九種、亦太ダ奢侈ナルヲ以テ、楠公ノ炯眼、早ク其亡滅セシムヲ着破セラレシモノナラン。昔時質素ノ風、亦想フベキナリ、ハ、白面ノ書生、乳臭ノ少年、行貨シテ食スル者ト雖、

亦間娼婦、酒肆ニ過ギリ、數名ノ校書ヲ聘シ、洋酸トテ、酒ヲ傾ク、絲竹喧嘈、歌舞樓ヲ搖カス、盛宴ヲ開ク、謂フベシ、布衣ノ士ニシテ、其驕奢ハ、北條入道高時ヲ壓倒スト、其志操ヲ挫折シ、學業ヲ放棄シ、遂ニ父母ノ憂ヲ貽スベキハ、楠公其人ノ智ヲ待タズシテ、看破スルヲ得ベシ、夫レ各自ノ材能ヲ以テ、各自ノ嗜好ヲ遂ゲ、各自ノ快樂ヲ取ル、固ヨリ各人ノ自由ニシテ、他ノ干渉シ得ベキニ非ズト雖、亦各自其分ヲ知ラズンバアル可カラズ。

第七 黒田如水銀百枚ヲ取ラガリシ事

豊公征韓ノ事アルニ際シ、日根野備中守ヲシテ、韓廷ニ使セシム。備中守甚ダ貧困ニシテ、其旅装ヲ辨ズルノ資無シ。偶、三好新右衛門ヲ紹介トシテ、銀百枚ヲ黒田如水ニ借レ



リ、歸朝ノ後チ、新右衛門ヲ伴ヒ、如水ヲ訪フ、其借リタル所ノ銀ヲ償還シ、更ニ銀十枚ヲ添ヘタリ、以テ利子トスル心ナリ、如水出デ、面晤シ、暫クアツテ近臣ヲ呼ビ曰ク、曩キニ人ノ贈クレル鯛アリ、厨人ヲシテ其肉ヲ腊トシ、蓄ヘシメヨ、且ツ今ハ其骨ヲ羹トシテ酒ヲ脩メヨト、二人之ヲ聞キ、心ニ不滿ヲ抱ケリ、而シテ酒既ニ畢リ、如水サキノ銀ヲ出シテ曰ク、我レ素ヨリ貸スニ意ナシ、唯、卿ガ給セザル所ヲ補助セシノ、ト、再三之ヲ強クシ、氏、遂ニ取ラズ、二人感謝ニ堪エスレテ歸レリ。

附記

關ヶ原ノ役アル前、大坂守邸ノ士ヨリ、其變ヲ如水ニ報ズ、如水曰ク、平素時ノル所ハ、金銀ハ此ハ如クナル時ノ用ニ充テ、ンガ爲ナリ、來テ我ニ屬セ、ントスル者アラバ、

幾多ノ士ヲモ養ハシ、其内ニ隱ルハ士アラバ、財ヲ以テ出デ、兵器ヲ執ラシメヨトテ、巨多ノ金銀ヲ散ジテ、四方ノ士ヲ招募セリ、櫻所子曰ク、宜矣哉、黒田如水ノ智勇絶倫ヲ以テ、當時ニ稱セラレシ、其鯛ヲ割キ、其肉ヲ腊トシテ之ヲ蓄、其骨ヲ羹トシテ客ヲ饗スルヲ以テ視レバ、平素節儉ヲ言フ、質素ヲ專ラトセシ、想ヒ見ル可シ、然ルニ朋友ニ接スルニ義アリ、變ニ處スルニ斷アリ、其金銀ヲ視ル、泥土膏大ラズ、真ニ武人ノ氣魄トイフ可シ、抑モ節儉ノ事タル已レガ欲ヲ制シ、冗費濫用ヲ省キ、其為スベキ事ニ臨ムデハ、毫髮モ吝ム、無キニ在リ、然ルニ今世人士ノ爲ス所ヲ視ル、其朋友ニ接スル、離合慶賀等種々ノ事アルニ際セバ、旗亭



畫閣ニ會同シ、華筵銀燭、以テ山海ノ美味ヲ排列シ、綠酒紅  
 裙歌呼樓ヲ撼カスノ一大盛宴ヲ開クヲ以テ例トス、一宵  
 費ス所無慮數十金、人ニ語テ曰ク、我敢テ奢侈ニ耽ルニ非  
 ズ、交際上已ムヲ得ザルナリト、其交リ泥キモノハ、此ノ如  
 キ宴會ニ招カル、一死シト虚日無シ、何ゾ宴會ノ太ダ盛  
 ナルヤ、而シテ此輩亦其仰事俯畜ノ為メニ要スル所、或ハ  
 闕乏ヲ訴フルナキニ非ズ、亦何ゾ親戚朋友ヲ助クルノ餘  
 カアラシヤ、故ニ其貸ス所百金ニ盈タザルモノヲモ、借テ  
 還サザルヲ憤リ、昨ノ親友、今ノ仇讎トナルアリ、或ハ骨肉  
 ノ間ニ於テ、狀師ヲ倩フテ、法司ノ裁斷ヲ請フアリ、滔々ト  
 シテ天下ニナ然ラザル無シ、是他ナシ、假令親朋ノ災厄ニ  
 遭遇スルコトアリトモ、平素交際ノ為メニ費ス所過多ナル

ヲ以テ、之ヲ補助スルニ由ナキナリ、特リ之ヲ補助スルニ  
 由ナキノミナラズ、浮薄ノ世情、人若レ一蹶セバ、之ヲ陷阱  
 ニ擠倒シ、而シテ石ヲ下ダサントス、抑モ此ノ如キヲ致ス  
 所以ノ者ハ、風俗漸ク奢侈ニ流レ、平素ノ交際ニ消費スル  
 所多ク、隨テ交際ノ外ニモ、亦冗費濫用多キニ至ルヲ以テ  
 ナリ、夫レ外ニ伸ブル所アラントスレバ、内ニ縮ムル所ナ  
 カル可カラズ、彼レニ緩ナル所アラントスレバ、此ニ急ナ  
 ル所ナカルベカラザルハ、自然ノ數ナリ、人各、其入ル所ニ  
 限リアリ、奚ゾ内外彼此、共ニ滿溢ナルヲ得ン、黒田如水  
 ノ智且ツ富アルモ、此ノ如クナル能ハズ、故ニ其友ニ接ス  
 ルニ義ヲ以テシ、變ニ處スルニ財ヲ愛マザル為ニハ、平素  
 客ヲ饗スルニ、鯛ノ骨ヲ以テスルノ儉素ヲ守ラザルヲ得



ズ。況ヤ其智其富如水其人ニ若カザルモノヲヤ。然レバ則チ貴族豪估ト雖氏猶ホ儉素ヲ守ラズンバ其家ヲ敗ル。何況ヤ寒士貧生猶ホ交際ノ爲メニハ冗費濫用ヲ吝マザルヲ以テ名譽ノ如ク思倣ス者アルニ於テヤ、是其友ニ接スルニ信義ヲ失シ易ク疾病事故アルニ逢ヘバ借ク所ヲ失シ尾ヲ揺カシ耳ヲ帖シテ人ノ憐ミヲ乞ヒ、廉耻地ヲ掃ヒ、浮薄俗ヲ成シ其嗜欲ノ爲メニハ金銀ヲ視ル丁泥土ノ如クシ信義ノ爲メニハ之ヲ視ル丁寶玉ノ如クスルニ至ル所以ナリ。宋ノ李沆ハ一代ノ賢相タリ又ニ語テ曰ク魯論ニ所謂用ヲ節シテ人ヲ愛スノ一語ハ我レ身ヲ終フルマデ行フモ盡スト能ハズト嗚呼如水モ亦善ク用ヲ節シテ人ヲ愛スト謂フベキナリ。今世ノ人止以テ如何ヲ爲ス。

第八 家康公恭儉ナリレ事

家康公ノ駿府ニ在ル日。近臣某美麗ナル袴ヲ着ケテ公ノ前ニ出タリ。公其名ヲ問フ。曰ク茶字ト名クルモノナリト。公艷然ト色ヲ變ジテ曰ク汝ガ我レダニモ未ダ知テ止ル美麗ハ服ヲ着スルハ何事ゾヤ。天下久シク亂シ萬民塗炭ニ苦ミシモ。近來漸ク平和ニ趣ク然ルニ早クモ驕侈ハ心ヲ生ズルハ是レ亂ノ端ナリ。汝ガ如キ奢侈ヲ好ム者ハ我が左右ニ居ク可カラズト痛ク叱責セラレタリ。英勝院(女房ノ名)或時公ニ上言シテ曰ク公常ニ澣濯ハ白衣ヲ服セラハト雖氏之ヲ賤婢ヲシテ澣ハシムルモ憚リアリ。侍女ヲシテ濯ハシムレバ柔荑ノ手指血流ルニ至リ。太ダ難色アリ澣衣ヲ服セラレザルモ可ナラズヤト。



公之ヲ聞テ曰ク、婦女ノ理ヲ解セザル、之ヲ言フモ益ナカ  
 ル可シト雖ドモ、諦カニ我が言ヲ聽ケ、卿等ハ駿府ハ倉庫  
 ハハヲ視テモ、其多キニ駭ク可シ、京都大阪其他ハ地方ニ  
 於ケルモ、亦倉庫アリ、布帛ハ山積ス、故ニ日ニ百匹ヲ服シ  
 タリトモ、其足ヲガルヲ憂ヘズ、然リト雖、氏子孫萬世ハ為  
 ス、天下衆庶ノ為メヲ思フガ故ニ、常ニ澣衣ヲ服ス、何トナ  
 レバ、天道ハ奢侈ヲ惡ムモノナレバ、ナリト  
 公或時一室ニ入ラントシテ、其袴ヲ亮隔ノ鈎匙ニ掛ケタ  
 リ、公手ツカラ之ヲ外ヅシ、氣ヲ嘘シテ、皺ヲ直サレタレバ  
 近臣輩見テ微笑スル者アリ、而シテ後チ公近臣ニ謂テ曰  
 ク、我レ袴ヲ愛ムニ非ズ、此袴ハ貧窶ナル婦女ハ辛苦ニ成  
 リシモ、ハナリ、人トシテ其需用スル所ハ品物ハ如何シテ

成リシヤヲ知ラバ、レハ猶小禽獸、以テ故ニ慍ネニ四思  
 フ思ハズンバ、世ヲ治ムルトナ得、カラズト。

公豐臣關白ト和スル、一年濱松城ニ在リ、日寒風凜烈タ  
 リ、即チ左右ニ命ジテ外套ヲ致サシム、侍暨近藤縫殿、繡  
 被ヲ進ム、即チ豐關白ノ贈ル所、紅梅鶴章、光彩目ヲ奪、公  
 覺感シテ曰ク、焉ゾ此華麗ナル者ヲ用、牛ヤ、五口レ曾テ豐  
 家ニ已ムヲ得ズシテ、一タビ之ヲ着ス、今豈ニ再ビ着シ、以  
 テ我家朴素ノ風ヲ破ル可ケンヤト、更ニ他ノ短挂ヲ呼デ  
 之ヲ服ス、  
 櫻所子曰ク、易ニ曰ク、節スルニ制度ヲ以テス、財ヲ傷ラズ、  
 民ヲ害セズト、禮記ニ曰ク、入ルヲ量テ出ルヲ為スト、經濟  
 學タル、深遠廣高ナリト雖、其要此ニ外ナラズ、而シテ



世人モ亦此理ヲ知ラザル者ナレ、而カレ氏之ヲ實際ニ行  
フハ太ダ難シ、何トナレバ、衣服飲食宮室ヨリ、玩好ノ器具  
ニ至ルマデ、人欲ハ限り無クシテ、財用ハ限リアリ、限リア  
ル財ヲ以テ、限リ無キノ用ニ供スレバ、則チ財竭キ民窮ス  
ルニ至ル、古來明君賢相ハ皆ナ能ク已レニ克テ、儉素ノ行  
ス、即チ漢ノ文帝、百金ノ費ヲ愛ムデ、露臺ヲ作ラズ、上書ノ  
囊ヲ聚メテ、帷幕ヲ製シ、幸スル所ノ夫人、衣地ヲ曳カザリ  
シガ如キ、明ノ太祖、散騎舎人ノ衣服鮮麗ナルヲ見テ、其價  
ヲ問フ、五百貫文ト答フ、帝大ニ驚キ、五百貫ハ、農夫數口ノ  
家一歳ノ資ナリ、是ヲ一衣ニ費ヤス、驕奢太シト、痛ク譴責  
セラレシガ如キ、傳ヘテ以テ歴史ノ美談トシ、人口ニ膾炙  
ス、善哉徳川氏ノ起ル、儉素ヲ以テ守成ノ主義トシ、豊家

ノ豪奢ヲ學バズ子孫ノ爲メ、衆庶ノ爲メ、計畫スル所深ク  
且ツ速キハ、漢文明祖ニ耻ヂズ、是則チ三百年間ノ太平ヲ  
致セシ所以ナリ、而シテ其衰運ニ赴クヤ、奢侈ヲ事トシ、祭  
廩空乏シテ、聚斂益甚シク、賄賂公行シ、紀綱紊亂シ、國々凋  
弊シテ、亦如何トモス可カラザルニ及ベリ、節儉ト奢侈ト  
ノ、治亂興亡ニ關スル、此ノ如ク、赫トシテ火ヲ視ルヨリ  
モ明カナリ、天下ノ大ヲ保有スル尚ホ且ツ然リ、況ヤ庶  
人ノ小財産ヲ所有スルモノヲヤ、苟モ儉素ヲ守ルコトヲ爲  
サズ、奢侈淫靡ヲ事トスルアラバ、志操之カ為ニ折テ、信義  
之ニ由テ泯ビ、亡身敗家立ドコロニ至ラン、何ゾ其他ヲ顧  
ルニ暇アラムヤ、

第九 井伊直孝衣ヲ乞フタル事



井伊直孝、大阪ノ陣營ニ在リ。時寒冬ニ屬ス。一日二人ノ士ヲ遣シテ斥候トス。歸路雨ニ逢ヒ、滿身濕濡セリ。直孝其衣ニ領ヲ脱シテ二人ニ與フ。而シテ之ニ換フルノ衣無シ。人ヲシテ安藤直次ニ襖子ヲ乞ハシメテ曰ク、僕ガ附身ハ故衣ハ雨ニ逢フテ歸リタル家士ニ與ヘ、換ヘ服スベキ。衣無シト。而シテ直次ノ贈レル衣ヲ穿テ、革袴ヲ着ケテ、屢將軍ノ前ニ出デタリ。

附記 井伊直孝ノ封セラレタル彦根ハ、畿甸ニ近接シ、琵琶湖舟楫ノ便アリ。屢京洛ニ來往スルヲ得ルヲ以テ、元和偃武ノ後チハ、其藩士ノ風漸ク奢侈ニ赴キ、美麗ナル衣服ヲ好ム。直孝其風俗ヲ矯正スベキ事ヲ思惟シ、江戸ヨリ歸程ニ上ボル前從者ノ數ヲ計リ、綿衣ヲ裁セシメ、而シテ彦根

ニ達スルノ日、早晨旅館ニ於テ從者ニ之ヲ分テ服セシメタリ。彦根ノ士出デ、侯駕ヲ迎ノルモノ、各袷服シテ城外ニ鷓行鷺列ス。前發ノ士盡ク綿衣ナルヲ視テ、少ク恠々色アリシニ、直孝ハ轎窓ヲ開キシヲ望視スレバ、頗ル垢膩ナル綿衣ヲ穿テタリ。諸士慚汗背ヲ浹ホシ、其服シタル所ハ美服ヲ裂カント欲スルハ思ヒアリ。爾來華美ヲ好ムノ風漸ク地ヲ拂フニ至レリト。

櫻所予曰ク、今日ノ形狀ヲ以テ視レバ、假令昔時質素風ヲ成セシト雖、三十萬石ノ封土ヲ有シ、徳川氏柱石ノ臣タル、井伊直孝其人ニシテ、衣ヲ脱換スベキモノ無カリシトイフハ、信ジ難キガ如クナリト。雖、當時儉素ノ此ノ如クナルヲ想ヒ見ル可シ。物移リ星換リ、三百回ノ春秋ヲ經過



シタル今日ニ於テハ、都會城邑至ル所羅綺ヲ纏ヒ、錦繡ヲ  
翻シ、房室ヲ窺ヘバ、繡紋花ノ如ク、街衢ヲ望メバ、傘影雲  
似タリ、今古變遷ノ情態、仙凡境ヲ異ニスルガ如シ、是固ヨ  
リ照代ノ恩波ナリト雖、亦華美ヲ專ラトシ、冗費濫用ヲ  
節減シ、以テ有益ナル事業ニ努力セスンバ、愛國ノ民ニ非  
ルナリ。

第十

紀州侯賴宣ノ生母粧資ヲ捐テ、士ヲ養フ事

紀州侯德川賴宣ノ生母ヲ阿萬ノ方ト曰フ、嘗テ人ニ語テ  
曰ク、諸公子ヲ愛シテ、之ニ献ズル、名劍寶器ヲ以テスル  
ハ尋常ノ事ハシ、妾ハ以為ク、國家ニ藩屏タル主將ノ寶ト  
スル者ハ、名劍寶器ニアラズシテ、勇武ノ士ヲ得ルニ在リ  
若シ、且事アルニ際セバ、勇士ヲ舍テ、將夕何ヲ力恃マ

ンヤ、聞ク塙團右衛門ハ、舊主ノ爲ノニ、銅セラレ、蹉跌坎軻  
ナリト、妾此人ヲ得テ以テ、公子ヲ擁護セント欲ス、願フニ  
名劍寶器ニ勝ル若干ゾヤ、乃チ每歲受クル所ノ粧資五百  
金ヨリ、二百金ヲ除キ、之ヲ團右衛門ニ贈致シ、以テ他日ノ  
用ヲ待ツト。

櫻所子曰ク、裙釵衣帶ヨリ、以テ粧奩鏡函ニ至ルマデ、其華  
美鮮麗ヲ欲シテ、費用ヲ愛シマズ、翻テ親戚朋友ニ贈遺ス  
ルニ至テハ、頗ル慳吝ニシテ、眉ヲ擷メ、心ヲ捧グルニ至ル  
ハ、婦女ノ常態ナリ、縱使、韃索以來年ヲ閱サルノ昔日ニ於  
ケルモ、富メバ則チ必ズ驕ルハ、英雄豪傑ト雖、氏免カレザ  
ル所ナリ、然ルヲ况ヤ、婦女ノ身ヲ以テ、其脂粉ノ資ヲ捐テ  
テ、國家ノ爲ニ勇士ヲ養フガ如キヲヤ、紀侯賴宣、天資英



邁勇武ヲ以テ世ニ稱セラル。蓋シ母教ノ薰陶スル所ニ由ルナルベレ。嗚呼侯ノ生母亦絶世ノ賢婦人ナル哉。

第十一 水戸黄門光國ノ金言

黄門常ニ其臣屬ニ訓誨シテ曰ク、天下國家ヨリ以テ庶人ニ至ルマデ、節儉ヲ以テ最上ノ德行トス。今ヤ治平日久クシテ、上下恬熙、日ニ奢侈ニ赴キ、衣服飲食宮室器具ニ至ルマテ、競テ華美ヲ貴ズ。故ヲ以テ一國ニ一家ニ其費用殆ンド支ハ難カラントス。是レ在上ノ君子富貴ニ生長シ、榮華ニ慣習シテ、心ヲ斯ニ用ヤラレザルヨリ、其風俗自カラ下モニ及ベルナリ。殊ニ諂諛ノ爲メニスル進献ニ美麗ヲ極メ、厚遺其執事近臣ノ輩ニ及ビ、以テ髯ノ塵ヲ拂フ。此風一タビ行ハル、ヨリ、天下窮乏ノ基トハナレリ。況ヤ頗リニ

土木ヲ起ス、コトヲ好ム世ニシテ、諸國ニ其費ヲ課セラル、ガ故ニ國主ハ之ガ爲メニ萬金ヲ捐シ、國主歳用給セザレバ、自カラ士農工商ヲ虐ゲテ、其闕ヲ補ハサルヲ得ズシテ、遂ニ一國ノ窮乏トナレリ。治平久シフシテ、此ノ如クナルニ至ルハ、古來皆然リ。縱使舜禹ノ徳ヲ慕フニ及バザルモ、止ムコト無クバ、漢文ノ節儉ヲ專ラトセラレシヲ以テ、家給シ人足ルニ至リシコトヲ模範トセラレンコトヲ欲スルナリ。士庶人モ各自ノ分ニ從テ、節儉ヲ守ラバ、則チ親戚朋友ヲ助ケ、其子孫ヲ教育スルノ資ニ乏レカラス。然レモ節儉ト吝嗇トハ、混シ易シ能ク、此分界ヲ辨知スベシ。吝嗇ナルモハハ、上ニシテ之レヲ為セバ、則チ衆庶服セズ。下ニシテ之ヲ為セバ、則チ親戚朋友相恟ナハズ。理ニ背キ、義ヲ缺



カトハハハナル可シ

櫻所子曰ク此水戸黄門ノ訓誨ハ年山紀聞チ出タル所ニシテ別ニ巧妙ノ工夫ヲ説カレシ者ニ非ズト雖モ殊ニ斯ニ掲グルモノ識者ノ見ル所千古同揆ニシテ亦移動スベカラザルヲ示スノミ夫レスチユワルトミルハ歐洲ニ於テ經濟學士ノ翹楚トスル所ナリ其經濟論ヲ著セルヤ中ニ於テ馬鈴薯ヲ樹藝スルヲ以テ凶荒ヲ豫防スルノ最上策タルヲ説ケリ賢人哲士ノ言ハ平夷ニシテ恠奇人ヲ驚カス者ナク真理ノ動カス可ラザル者其中ニ存ス今世ノ人士動モスレバ興産殖業ノ策ヲ談ジ節儉ノ要務タルヲ知ラズ害ヲ攘フトヲ外ニシテ而シテ利ヲ興スヲ務メバ國家ノ富強立ドコロニ致スベシト為ス殊ニ知ラズ利ヲ

興スハ害ヲ除クニ若カザルヲ夫レ財ハ天雨鬼神ノ非ズ天地間復々何ゾ儉素ヲ守ラズレテ富ヲ致スノ術アラシヤ世ノ富國ノ策ヲ講スル人請フニ思セヨ

第十二 岡野左内貨殖ヲ好ミシ事

岡野左内ハ上杉氏ノ臣ナリ景勝ニ仕ス其封ヲ米澤ニ移スニ及ビ去テ蒲生秀行ニ仕フ食禄一萬石ナリト云フ左内恆ネニ貨殖ニ志シ家巨萬ノ富ヲ致ス而シテ大小刑及ビ他ノ碎粒等金銀ヲ一室内ニ排列シ以テ娛樂ト為ス毎月必ズニ三次ニ及ブ人聞テ之ヲ賤レム偶隣間相聞フ者アリ人アリ來テ報ズ左内恰モ室内ニ在リ黄白ヲ揮當スルニ暇マ無ク直チニ往テ之ヲ和解シ翌日ニ至テ返ル黄白猶ホ室中ニ狼籍タリ衆始メテ其大度ナルニ服ス是



ヨリ先キ関ヶ原ノ役アル左内永樂錢一萬貫ヲ景勝ニ獻  
ジテ曰ク敢テ軍需ヲ資クルニハ非ズ聊カ以テ將士ノ勞  
ニ酬ヒント馬奴アリ黄金一枚ヲ珍藏ス左内大ニ之ヲ奇  
トシテ曰ク人ノ心ヲ用ユル當サニ此ノ如クナルベシト  
之ヲ賞スルニ十金ヲ以テス仕ヘテ忠郷ノ時ニ至ル其病  
革カナルヤ金三萬兩ヲ忠郷ニ獻ジ三千金ヲ以テ其弟忠  
知ニ獻ジ曰ク以テ平素ノ恩ニ報スト亦五金十金ヨリ以  
テ百金ニ至ルマテ諸友ニ遺贈スル各等差アリ而シテ舊  
券ハ其櫃トトモニ之ヲ燒ク

櫻所子曰ク世ノ貨殖ヲ事トシ素封ノ富ヲ致ス者ヲ視ル  
ニ悭吝貪汚至ラザル所ナキ者多シ殊ニ知ラズ貨財運動  
ノ妙機神算ハ積ムテ能ク散ジ國ヲ利シ以テ人ニ及ブニ

在ルヲ左内ノ如キハ頗ル貨財運用ノ妙ヲ會得ル者  
ト謂フベキナリ其券ヲ燒クガ如キニ至テハ左内ノ胸襟  
點塵着カズ清風洒々如クナリ世ノ萬金ヲ積ムテ而シテ券  
ヲ斗鍾ニ折ク能ハサル者以テ如何ト視ルヤ

第十三 備前侯光政掣鞋奴ヲ逐ヒシ事

備前侯光政或時城壕ニ泛ベル水禽ヲ彈射セント家臣某  
ノ屋背ニ出テ之ヲ窺フ掣鞋奴門道ノ外ニ於テ其副道  
ヲ脱シ内ニ入ル光政歸ラントスルトキ之ヲ見テ曰ク何  
人ノ副カナルヤト傍ニ在ル者答ヘテ曰ク公ノ奴ノ帶  
ル所ナリト光政色ヲ變ジテ曰ク絲ヲ以テ靴ヲ繫ス分ニ  
應ゼザルハ華奢ヲ好ム者ナリト直チニ其奴ヲ逐フ此ヲ  
傳ヘ聞ク所ノ斯興僕隸等渾テ其刀靴ヲ繫スルニ革ヲ以



テスルニ至レリ。

櫻所子曰ク、備前侯ノ英明ナル、儒術ヲ尊ビ、藩士ヲ愛養シ、封内ノ人民ミナ其恩澤ニ浴セルガ如キハ、世人ノ遍ネク知ル所ナリ、而シテ玉帛禮幣ヲ厚フレテ名儒ヲ招キ、千鍾ノ禄ヲ愛マズシテ名士ヲ養ヒ、民ノ疾苦ヲ問フ、赤子ヲ安ニスルガ如クセシモ、未ダ嘗テ帑廩ノ闕乏ヲ訴フルニ至ラザリシ者ハ、他無し、公ガ自ラ奉ズル太々薄クシテ、士風ノ太平ニ慣レ、奢侈ニ趨ルノ源ヲ遏止セント、深ク意ヲ用テ備前風トイフ、享和ノ末ニ至テハ、其餘影殘聲ノ漸ク泯

滅セシニヤ、江戸ノ市民モ亦容易ニ識別シ能ハザルニ至レリト。光政ノ質素ヲ以テ一藩ノ風尚ヲ成セル者ハ、則チ謚シテ芳烈ト曰フ所以ニシテ、民其澤ヲ被ムルノ本ナル

第十四 酒井侯忠清補綴セル相服ヲ服セシ事

酒井忠清ハ幕府ノ執政トシテ威權アリシ人ナリ、或時殿中ニテ汗出ケレバ、相服ヲ脱シテ欄頭ニ曝ラセシヲ見ルニ、所々補綴セルモノナリシト。櫻所子曰ク、應仁以降、群雄割據、四海鼎沸シ、民其生ヲ聊ンセザルモノニ百年、徳川氏衰亂ノ餘リヲ兼ケテ、一意勤儉以テ斯氓ヲシテ蘇息セシメントスルニ在リ、且ツ戦亂日久ク、雨ニ沐シ風ニ梳ルノ餘習、未ダ全ク脱セズ、故ヲ以テ



麗衣鮮食ハ、武人ノ風尚ニ於テ耻トスル者ノ如シ。然リト雖凡、酒井侯ノ如キハ、身有土ノ諸侯トシテ、天下ノ政柄ヲ執ル。國ノ大臣タリ、然ルモ猶ホ修補セル相暇ヲ服シ、以テ政事堂ニ上ボル。況ヤ其他ヲヤ。古人曰ク、治ヲ致ス難キニ非ス。治ヲ保ツヲ難シト為スト。何トナレバ、天下ノ未ダ治ラザル。上ノ焦心苦思スル所、下ノ進計獻議スル所。治安ヲ是レ圖カルモノニ非ルハ無シ。天下既ニ治安ヲ致シ、亦憂フベキモノ無ケレバ、則チ上下逸樂ニ相從ヒ、閑暇ニ相忘ル。故ニ天下治リ、而シテ畏ル可キ者始メテ生ジ、天下安ク、而シテ憂フ可キ者始メテ萌ス。然ルニ慶元偃武ヨリ、明曆萬治ニ至ルコロマデハ、尚ホ治安ヲ保ツニ致々シテ、逸樂閑暇、以テ屍ヲ馬革ニ裹ム。昔日ノ慘苦ヲ忘ル、ニ至ラズ。

當時ノ士風想見ルベシ。宜ナルカナ。昇平ノ基ヲシテ、益鞏固ナラシメ、民其澤ヲ被ムル。三百年ノ久シキニ及ビシ、第十五 土井利勝零絲ヲ棄テザリシ事。

大炊頭土井利勝、一日漢絲ノ零餘一尺バカリナルヲ以テ、近臣大野仁兵衛ニ付シテ曰ク、汝ヲ謹ムバ之ヲ藏メヨト。衆其鄙吝ナルヲ笑フ者アリ。利勝置テ問ハズ、三年ヲ經タリ、偶利勝腰刀ノ絛解ケタリ。仁兵衛ヲシテ、往キニ付スル所ノ漢絲ヲ持チ來ラシム。仁兵衛直チニ之ヲ腰袋ニ取り、以テ呈ス。利勝手ヅカラ其絲ヲ以テ刀絛ヲ約シ、欣然トシテ微笑シテ曰ク、無用ハ用今ニシテ驗アリト。遂ニ其宰寺田某ヲ召シテ曰ク、私甚ダ仁兵衛ノ謹愨ニシテ、生命ヲ重ンズルヲ嘉ニス。ソレ祿三百石ヲ増シ與ヘヨ。抑モ漢絲ハ



物タル彼國ニ在テ桑婦蠶織辛苦ハ手ニ成リ展轉運輸之  
渺タル碧水ヲ航シ以テ我地ニ入ル其人ハ勞カヲ經ル幾  
干ゾヤ則チ尺寸ハ零餘ト雖氏徒ニ之ハ蠶芥ニ委スル者  
ハ是レ天物ヲ棄ルナリ孤ガ恆ニ畏懼スル所ナリ而シテ  
仁兵衛ノ之ヲ守テ失ハザルハ之ヲ天ニ事スル者ト謂フ  
モ可ナリト輒チ戲レテ曰ク一尺ノ絲三百石ノ祿ヲ博ス  
獲ル所亦多ク鄙吝ヲ笑フモノハ之ヲ如何ト視ルヤト  
櫻所子曰ク土井利勝ノ如キ節儉ノ道ヲ知ル人ト謂フベ  
キナリ世人多クハ千万金ノ容易ニ得カラザルヲ知テ  
而シテ錢釐ノ重ンズ可キヲ知ラズ殊ニ知ラズ錢釐ヲ積  
ミ以テ巨萬ノ額ニ至ル可キヲ然ルニ零絲斷絹モ猶ホ  
之ヲ重ンジテ而シテ其士ヲ賞スルニ三百石ヲ以テシテ

愛シマズ利勝ノ如キハ節儉ノ理ニ達セル人ト謂フ可キ  
ナリ今世ノ巨萬ノ富ハ企及ブベカラズトシテ錢釐ヲ泥  
土視シ鎔銖ヲ塵芥視シ自ラ十金ヲ費スヲ愛マザルヒ人  
ニ一金ヲ與フルヲ欲セザル者豈利勝ノ風ヲ聞テ興起セ  
ザルベケンヤ

第十六 備前候綱政紙ヲ愛ム事

備侯光政ノ嗣子綱政一日美濃紙ニ書シ字ヲ誤リ更ニ之  
ヲ寫ス前ノ紙ヲ以テ近臣某ニ付ス某受ケテ之ヲ擲シ棄  
テ爛紙トス綱政責メテ曰ク汝チ何ゾ妄リニ紙ヲ棄ル  
トヲ爲ル復タ必ズ適應ノ用ニ供ス可キナリ片紙尺楮ト  
雖氏多クノ勞カヲ費シテ成レル者ナリ我敢テ紙ヲ吝ム  
非ス其勞カヲ愛ムナリト



〔附記〕 水戸黄門光國深ク紙ヲ愛シシ。書翰ノ封套ハ長短ヲ問ハズ之ヲ接ギテ詩歌ノ草稿ヲ起スノ用ニ供シ。座上ニ水ヲ滴ラス等ノ事アレバ之ヲ拭フニ紙ヲ用キズ。必ズ布片ヲ以テス。恆ニ女監等ヲ戒メ。妄リニ紙ヲ費ス可カラズトイフ。然レモ猶ホ紙ヲ費スコト多シ。一日女輩ニ語テ曰ク。抄紙ハ觀ヲ取ル可キ者ナリ。往テ觀ヨト。即チ脂粉一隊。松草村ニ在ル抄紙場ニ赴ク。川上ニ楯棚ヲ架ス。坐スル所ニハ簀上ニ涼簾一片ヲ籍ク。此日北風栗烈。寒威膚ニ迫ル。紙ヲ抄スル男女ハミナ赤脚ニシテ水中ニ俯仰ス。女衆大ニ驚キ。且ツ其寒ニ耐ヘズ。歸テ後チ抄紙者ノ艱苦ヲ説ク。黄門曰ク。紙ヲ製スルノ業。此ノ如クソレ易スカラザルナリ。故ニ妄リニ費スベキニアラザルナリト。爾後後房ノ内

亦多ク紙ヲ費ス者無キニ至レリ。  
櫻所子曰ク。良齋翁曾テ南史ニ沈麟士ガ火ニ遭テ書數千卷ヲ焼キ。年六十ヲ過ギ。耳目聰明。反故ヲ以テ抄寫シ。復タ二三千卷ヲ爲ストイヒ。三輪執齋ガ養子ノ説ヲ記セシ。文ノ反故ニ書セリ云々ノ事ヲ引キ和漢トモニ製造未ダ盛ナラス。諸物不足ナルヲ以テ。之ヲ愛重シ。人モ亦儉素ヲ守レル。コトヲ證シ。又翁ガ所藏ノ淮海筆音ト題セル。嘉曆四年ニ寫シタル本ハ半紙ノ如キ紙ニテ。其半面ニ一行廿八字十四行トシテ。空紙ナキヲ見バ。古ハ紙ノ不足ニシテ。且ツ儉素ナリレト想ヒ見ル可シトイヘリ。彼庭訓往來ニ白紙拂底ノ間。反古ヲ用フル所ナリトイフモ。亦妄ナラザルヲ知ル。備前侯ニ水戸侯ニ身大藩ノ主トシテ。猶ホ隻紙ヲモ



妄リニ費サバリシヲ視バ假令其製造ノ器械猶ホ乏クシ  
テ人カヲ勞スルノ多キニ由ルト雖氏抑モ亦儉素ヲ尚グ  
ノ一斑ヲ窺フニ堪タリ今世製造ノ業未ダ大ニ振興セ  
シテ紙ヲ費スノ多キ或ハ昔日二十倍セン故ニ供給ハ  
常ニ需用ヲ充タスニ足ラズ紙モ亦外輸ヲ仰グ其價格亦  
隨テ翻貴セリ特リ紙ノミナラス布絮絹帛皆然ラザルハ  
無シ故ニ興産起業ハ目今我邦ノ急務タル世人ノ論究レ  
テ措カザル所ナリ其人々儉素ヲ守リ妄消浪費セザルノ  
一事モ亦今日ノ最大要務ト謂フ可キナリ

第十七

家忠公ノ乳媪本多正信ヲ面斥セシ事

將軍家忠公ノ乳媪某氏其名ヲ逸ス蓋シ參河ノ人ナリ人  
呼シテ大波オホナミ公ト曰フ媪賢ニシテ丈夫ノ風アリ公乳育ノ

故ヲ以テ之ヲ視ルト阿母ノ如クセリトイフ媪他ノ嗜好  
無シ但毎月二三カ次盡クカ獨カ興僕隸ヲ厨下ニ致シテ飯ヲ大  
饜ニ崇リ一々之ヲカ椀ニ裝シテ身親カラ饋シ以テ之ヲ供  
ス奴輩感戴シ其放饒ヲ極メテ止ム此ヲ以テ平生ノ娛樂  
ト爲ス一日本多佐渡守正信來リ候フ其親饋スルヲ見テ  
驚テ曰ク大婆公侍婢使令足ラザルニ非ズ何ゾ苦ムデ自  
ラ饋クルヲ之レ爲サンヤ媪憮然トシテ襟ヲ整ヘテ曰  
ク比來人子ヲ謂テ驕奢稍甚シト爲ス妾之ヲ聞キ敢テ信  
ゼザリキ乃チ今ニシテ其誣妄ナラザルヲ知ル子モ亦彌  
ハ郎タリシ時ヲ志レタルヤ妾昔イハレニ微ナル時一飯ノ思ヲ  
人ニ施サント欲シテ且ツ得ベカラズ今ヤ此大饜ヲ設ケ  
奴輩數十人ヲシテ快然飽食セシムル者ハ悉ク皆ナ邦家



思ナリ。而シテ獨リ微賤ノ時ヲ忘レテ可ナランヤ。子ハ天下ノ大老タリ。是ヲ之レ問ハズシテ徒勞ヲ以テ擬セラ。吾是ヲ以テ子ガ驕奢ニシテ自ラ省ル能ハサルヲ知ル。其政務ニ於ケルノ如何モ亦推知スベシト。正信赧然トシテ言無クシテ去ル。

櫻所子曰ク、二代將軍ノ謹厚ナル天稟ト曰フト。雖氏亦外良師傅ヲ得、以テ之ヲ輔翼シ、内チ乳媪ノ賢アリ、冥助暗養スル所アルニ由ルカ、今世微賤ヨリ出デテ、措紳貴族ノ乳母タリ、妻妾タル者、蓋シ少ナカラス。而シテ富貴ニシテ微賤ノ時ヲ忘レズ、厮與僕隸ニ親饋スルヲ娛樂トスル、大婆公ノ如キ者アルカ、多クハ驕傲ニシテ賓客アリト雖トモ出デ、接セズ、梳粧ノ餘暇ニハ、則チ三絃ヲ弄シ、月琴ヲ彈

ジ、巾箱本ヲ翻シ、以テ日月ヲ消シ、訪花觀劇ヲ以テ娛樂トシ、其甚キハ粧費若干ヲ指テ、梨園弟子ニ纏頭シテ人ニ誇ルニ至ル。知ラズ、其等ノ婦女ノ乳養生育スル所、果シテ冥助暗養ノ効アルヤ否ヤ。

第十八 青木民部少輔絹ノ衾褥ヲ謝セシ事

青木民部少輔囚ハレ、板倉伊賀守厚ク之ヲ遇シ、絹ヲ以テ裁シタル衾褥ヲ供セリ。民部少輔衾ハ衿ヲ執リ、其頭ニ加ヒテ謝シテ曰ク、我未ダ此ノ如キ卧被ニ纏ハレテ、夢ヲ結ビカル下無シ、敢テ辭セント。是ニ於テ、更ニ木綿ノ衾褥ヲ供ス。當時、大名ハ概ネ此ノ如キ風俗ナリシトイフ。櫻所子曰ク、惟ルニ應仁以降、元和ニ至ルマデ、四海騷然トシテ、世ノ武門武士タル者、平素尸ヲ馬革ニ裹ムノ日アル



コヲ志レズ、人民ノ衰弊亦極ル、故ニ萬鍾ノ祿ヲ食ム者ト  
雖氏、其衣服飲食ノ質素ナル、慣習俗ヲ爲セシ者ナルベシ、  
然リト雖氏、今世家萬鍾ノ祿アルニ非ズ、亦素封ノ陶荷ニ  
比スベキモノニモ非バンテ、其卧榻衾蓐ノ美錦衾爛タリ  
トモ謂フベキモノニ纏ハレテ、高眠スル者アリ、或ハ恐ル  
斯輩ガ、他日綿衾ヲモ、其衿ヲ執テ頭ニ加フルニ至ランコ  
トヲ。

第十九 大河内金兵衛松平信綱ヲ訪フ事

大河内金兵衛、一日閣老伊豆守信綱ヲ訪フ、信綱出テ、接  
ス、時恰カモ嚴寒、風刀剪ルガ如ク、戸隙ヨリ來ル信綱曰ク、  
爺ガ老健ヲ以テスルモ、寒ヲ覺フルハ壯年ノ者ニ勝サ  
ルベシ、巾ヲ戴イテ談話セラル、亦何ゾ妨ゲント、金兵衛

其言ヲ謝シ、故ハ巾綿ハ巾ハ懐ヨリ出シテ之ヲ被ムル信  
綱左右ニ命ジ、種々ノ縹紗ヲ以テ裁セル巾、凡ソ十有餘個  
ヲ齎チ來ラシ、意ニ適スモノアラバ之ヲ取レト謂、金  
兵衛曰ク、僕ガ巾ノ故クシテ且ツ粗ナルヲ以テ、此クノ如  
クセララル、ナルベシ、其言ハ感謝スルニ堪タリ、然リト雖  
氏、巾也者ハ、公ニ用キズ、其私ニ於ケルモノ、人ニ逢フ、片ハ之  
ヲ脱セザル可カラズ、巾ノ美ナル亦何ノ益カアラニヤト、  
遂ニ取ラズ。

櫻所子曰ク、松平伊豆守ハ、徳川氏股肱ノ良臣ニシテ、世稱  
シテ智囊ト爲ス、酒井忠世、青山忠俊ト並ニ家光將軍ノ傳  
トシテ、寛永ノ三輔ト名ク、徳川家守成ノ業ニ於テ謀畫ス  
ル所多シ、大河内金兵衛ハ其父ナリ、亦恆ネニ輔相ノ職任



ヲ重ニジ、敢テ伊豆守ニ驕ラズ、而シテ巾ノ美ナル亦何ノ益カアランヤノ一語、拔山ノ氣、扛鼎ノ力ヲ有ス、金兵衛亦權臣施政ノ如何ニ注目シ、一舉一動苟モ其心ニ慚セザル者アレバ、直言以テ之ヲ折ク、伊豆守ノ父タルニ耻ヂズトイフベシ、吁、寛永ノ時代、何ゾ良臣ノ多キヤ、

第二十

酒井忠真綿衣ヲ以テ納徴トセシ事

酒井修理大夫忠真其婚娶ノ前ニ當リ、本綿衣十領ヲ以テ納徴トス、老臣等恠ク問フ、忠真曰ク、予ガ藩士ヲ撫育シ、且公ニ對シテ其職ヲ盡シ、予ヲ欲スレバ、則チ節儉ヲ事トスルニ若カズ、故ニ予モ亦恆ニ綿衣ヲ服ス、又我が妻タル者ヲシテ善ク此意ニ順ガハシメザル可カラズ、若シ之ヲ否ナマハバ、離婚スルノ一事アルノミト、

櫻所子曰ク、忠真亦一城ノ主タリ、而シテ其妻ヲ娶ル綿衣ヲ以テ納徴トス、今ヤ寒郷僻地ノ農夫モ、猶ホ絹紬ヲ裁シテ其婦ニ夜被ス、今古開化ノ度同ジカラズト雖、其公ニ奉ズルト、私ノ業ニ從事スルトニ論無ク、忠真ノ心ヲ以テ心トセバ、世人ノ所謂獨立自治ノ精神ヲ振起スルニ足ルベシ、其素行若シ此ニ反スレバ、其結果モ亦之ニ反ス、

第二十一 酒和田喜六獨斷ヲ以テ金ヲ貸シタル事

積ムテ善ク散ズルハ、節儉ノ妙用ナリ、若シ財ヲ積聚シテ丘山ノ如クナルモ、此ヲ活動スル丁ヲ知ラザルハ、是レ守錢奴ノミ、今其財ヲ活用セシ酒和田喜六ノ事ヲ記サン喜六ハ、寛永時代ノ人、永井信濃守ニ仕フ、信濃守江戸ニ赴クニ當リ、喜六ヲ留メテ藩務ヲ総ベシム、藩士家計ノ給セ



ザルヲ訴へ、金ヲ貸與センコトヲ喜六ニ要請ス。喜六即チ其  
 主ニ請ハスシテ、金庫ヲ開キ、銀子千貫目ヲ貸ス。信濃守江  
 戸ヨリ歸ルニ及テ、喜六ヲ責メテ曰ク、汝チ何ゾ孤ニ告ゲ  
 ズシテ銀ヲ貸セシヤト。喜六頓首シテ謝シテ曰ク、某固ヨ  
 リ之ヲ申請スルモ、允可セラレザルコトヲ知ル。何トナレバ  
 今某ガ請ハズシテ、貸與セシマ、叱責セラルハ、以テモ、推  
 知ス可キナリ。若シ其允可セラレシコトヲ強テ請求スルハ  
 不敬ナリ。而シテ之ヲ貸サレバ、藩士ノ窮乏ヲ奈何セ  
 或ハ止ムヲ得ズシテ、上國ノ商估ニ就テ之ヲ借り、利子ヲ  
 其債主ニ占有セラレシヨリ、寧口金庫ニ儲藏スル所ハ  
 モ、ハナ出シテ之ヲ貸スニ若カズトシテ、請ハズシテ銀ヲ  
 貸與セリ。抑モ主公カ金銀ヲ儲蓄セラルハ、軍備若クハ

公務ノ爲メニ消費スルニ在リ、藩士ノ窮乏ヲ救ヒ、兵馬ノ  
 數ヲ減ゼザルコトニ意ヲ用ユルハ、則チ軍備ノ基本ニシテ  
 士ヲ養テ兵備ヲ怠ラザルハ、則チ公ニ對シテ其職任ヲ盡  
 スモノト謂フベシ。且ツ夫レ、府庫ノ財ハ之ヲ貸スモ敢テ  
 消糜スルモノニ非ズ。年ニ其十分ノ一ヲ納レシメ、十年ヲ  
 待テ全ク償還セシムルノ約束ナレバ、上ニ一毫ヲ損スル  
 所ナクシテ、下モ凍餓ヲ免カルハ、恩澤ヲ被ムル是某ガ  
 大利アツテ小損ナキヲ見、獨斷ヲ以テ斯事ヲ決行セシ所  
 以ナリ。嚴責重譴ハ固ヨリ期スル所ニテ、候ト云ヒケレバ、  
 信濃守モ其言ノ理アルヲ聞キ、緘嘿シテ止ミケルトシ。  
 櫻所子曰ク、將軍家光公文武兼備ノ士十七人ヲ、陪臣中ヨ  
 リ選抜セラレシコトアリ、酒和田喜六其一ニ在リ、喜六曾テ



林道春ニ從テ、儒經ヲ講究シ、又國風ヲ善クセリトイフ、思  
フニ喜六其主ニ害ナク其臣ニ利アルヲ視ルヤ、銀ヲ貸シ  
テ危ブマズ、專斷ノ責ヲ一身ニ擔フ、豈ニ毅然タル大丈夫  
ニ非ズヤ、幕政ノ稍衰フルニ及デハ、士風亦從テ萎靡シ、官  
倉中陳々紅腐、粟ヲ堆シ、而シテ野ニ餓莩アレ氏發スル  
ヲ知ラズ、偶賑恤ノ功益アルヲ知ルモ、嫌ヲ避ケテ敢テ口  
ヨリ出サズ、唯、已レガ地位ヲ危フセザラニユトヲ努ム、故  
ニ國老藩宰ト雖、區々タル例格ノ末ニ拘束セラレ、其藩  
廳ニ在ル、凜乎トシテ燕ノ幕ニ巢フガ如シ、敢テ已レガ才  
力ヲ展アルコトヲ知ラザルハ、亦立仗ノ馬ニ似タリ、手ヲ拱  
シ耳ヲ垂レ、阿諛緘嘿ヲ以テ得タリトシ、苟且怠慢ヲ以テ  
宜キニ適フトシ、其利ヲ知ルモ敢テ爲サズ、其害ヲ視ルモ

敢テ去ラズ、左顧右眎、吏議ヲ免カレ禍ヲ避クルニ汲々ト  
シテ、以テ久安ニ僥倖セリ、宜ナル哉、上下隔絶シ、言路壅塞  
シ、遂ニ維新革命ノ期ヲ促ガシ、封建制度ノ廢絶セラルハ、  
ニ至リシコト、今ヤ制度一革、小失ヲ畧シテ責ムルニ大綱ヲ  
以テシ、下モ其上ヲ疑ヒ、上其下ヲ忌ムヨリシテ、常ニ其肘  
ヲ掣シテ其足ヲ係ク所アルガ如キコト無クシテ、而シテ吏  
タルモノ、肩背ノ芒刺ヲ釋去ム意ヲ法令ノ外ニ措クヲ得  
ル所アルガ如シ、故ニ阿諛緘嘿、苟且怠慢ノ弊痕ヲ留メズ、  
然リト雖、已レガ地位ヲ危フスルヲモ顧ミズシテ、上下  
ノ利便ヲ謀ルコト、酒和田喜六其人ノ如キニ至テハ、蓋シ得  
易シトセズ、然レバ則チ、酒和田喜六ノ財ヲ用ユルノ妙ヲ  
知ルガ如キハ、抑モ末ナリ、其主ニ事フルノ至誠ニシテ、即



子滿腔ノ赤心アルト、斷行シテ危ブマザル、斗大ノ膽カト  
ハ、實ニ歎稱シテ餘リアリト謂フベシ。

第二十二 綾部道弘其子ノ奢侈ニ習フヲ懼レシ事

綾部道弘ハ、元祿時代某侯ニ筮仕セリ、剛直ニシテ篤行  
士ナリ、家貧ニシテ幼キキ學資ノ給スベキナク、艱苦困頓  
東西ニ漂泊シ、聊カモ其志ヲ屈セズ、遂ニ儒典ニ通ジ、傍ラ  
醫術ニ達セリ、人トナリ親黨故舊ニ厚ク、紛ヲ解キ難ヲ拯  
ヒ、其勞ヲ辭セズ、長官ニ對スル、直言シテ忌憚スル所無シ、  
人始々其嚴ヲ憚リ、久ラシテ後チ其恩ヲ信ジ、里閭相告ケ  
テ、吾黨ノ君子人ト稱シテ尊メリトイフ、道弘自ラ奉ズル、  
儉素ニシテ華飾ヲ喜バズ、偶人アリ、其子ニ彩飾ハ衣ヲ遺、  
外ハハ之ヲ服スルトハ許サズシテ曰ク、先君貧素ニシ

テ世ヲ終フ、我レ常ニ孝養ノ意ニ任セザルハ憾ム、吾モ亦  
辛勤多年、幸ニ俸資ヲ享ケテ兒女ヲ養ハト雖、其本ヲ  
忘レテ可ナランヤ、況ヤ人情儉ヨリ奢ニ入ルハ易ク、奢ヨ  
リ儉ニ復スルハ難シ、我レ吾ガ兒女ヲ愛セザルニハ非ズ、  
奢侈ニ習ハシメザラントヲ思フハミト、又其子ニ教ユル  
ニ、四書小學及ビ古文ノ詩ヲ以テシ、絶テ聲伎博局ノ事ヲ  
知ラシメズ、又其子安正ノ江戸ニ在リシ日、書ヲ遺テ曰ク、  
予蓬蒿ノ間ニ長シ、頗リニ嶮難ヲ經、以テ今日ニ至ル、未ダ  
夙志ノ萬一ヲ償フヲ能ハズ、幸ニ汝ガヲ生ハ、今年巳ニ強  
仕、早ク衰羸スルヲ覺フ、オモフニ汝チカ成立ヲ見ルニ及  
バサルベシ、今ヤ汝チガ勤學シテ怠ラザルヲ知リ、吾ガ志  
願ヲ満足セリ、汝チガ孝モ亦大ナリト謂フ可シ、夫レ道ハ



人倫ニ外ナラズ、徒ラニ心ヲ浮華ニ騁セテ日用ヲ虚フスル勿レ、凡ソ事ノ義ニ害ナキ者ハ時俗ニ從フベシ、國禮ニ違フ勿レト。

櫻所子曰ク、道弘ノ其子ヲ訓誨スル、人ノ父タル者ノ道ヲ盡スト謂フベシ、父母ノ心ハ人ニナ之レアリ、而シテ其子女ヲ愛スルノ深キ之ニ衣食スルニ鮮麗甘美ヲ以テシ、之ニ習學セシムルニ歌舞管絃ヲ以テス、故ニ其長スルニ及ベバ、則チ骨軟カニ筋緩フシテ、耐忍剛毅ノ事業ニ堪エズ、奢侈淫逸ノ嗜好ヲ去ル能ハズ、遊冶男子、淫奔阿孃ト為リ、醜ヲ世上ニ流ガスニ至ラザル者アルハ幸ナリ、既ニ奢侈ト逸樂ニ長シ、鄭聲衛風、其神經ニ薰染スルモ、人世必需ノ學術ニ短ナリ、奚ゾ其身ヲ立テ道ヲ行ナヒ、榮ヲ父母ニ及

ボス、アルヲ望ムベケニヤ、是原ト其父母タル者、兒女ヲ愛スルガ為メニ、翻テ兒女ヲシテ百年ノ身ヲ誤ルノ不幸ニ陥ラシム、古人曰ク、訓導ハ嚴ナラザルハ父ノ過チナリト、人ノ父母タル者、宜ク道弘ヲ以テ龜鑑ト為ス可キナリ、

第二十三 奥貫五平次飢民ヲ賑恤セシ事

奥貫五平次ハ、武藏國八間郡河越ノ人ナリ、友山ト號ス、世農桑ヲ業トシ、邑ノ豪民タリ、少フシテ學ヲ好シ、江戸ニ遊ビ、業ヲ成島錦江ノ門ニ受ケ、學成テ郷ニ歸ル、從學スルモノ多シ、寛保中、關東洪水アリ、八間郡最モ其害ヲ受ク、民舎湮没、數十里ニ亘ル、五平次即チ食ヲ舟ニ載セ、僮僕トトモニ、櫟ヲ搖カシテ、以テ往キ、餓者ニ飲食セシメ、其濕處ヲ視テ、病者ハ悉ク之ヲ載セテ還リ、已レガ家ニ養撫スル數百



人因テ其父ニ請フテ曰ク大人平生兒ニ誨フルニ儉ヲカ  
用ヲ節スルヲ以テス豈ニ今日ノ急アル爲メナラズヤ  
願クハ家世ノ積聚スル所ヲ以テ之ガ賑恤ニ當テント父  
喜ムテ之ヲ許ス是ニ於テ大ニ倉廩ヲ發キ飢民ニ施與ス  
流氓男女傳ヘ聞キ争テ臻ル門前市ノ如シ五平次多ク粥  
ヲ作テ奴ノ最モ恭謹ナル者數人ヲ擇ビ以テ之ヲ待タシ  
ム戒メテ曰ク餓者固ヨリ貧ナルニ非ス謹ムデ輕慢スル  
勿レト至レバ厚ク之ヲ弔慰ス飢民其辱キヲ拜ス五平次  
一二賓客ニ接スルガ如クシ壯幼ヲ問ハズ人ゴトニ米四  
升ヲ與ヘテ行カシム受クル者感謝セザルハ無シ既ニシ  
テ廩盡ク又人ヲシテ金ヲ四方ニ齎ラシ穀粟及ビ大豆蕎  
麥ヲ買ハシム金モ亦盡ク又父ニ請フテ田宅ヲ江戸ノ富

商ニ質トシ金ヲ得以テ之ニ繼グ冬十月ヨリ翌年ハ夏四  
月ニ至テ止ム惠施ノ及ブ所四十八村終始救フ所十萬六  
千人餘事官ニ聞ス大ニ錢帛ヲ賞賜シ門閭ニ旌ス  
河越侯秋元但馬守涼朝執政タリシ時大ニ五平次ガ爲ス  
所ヲ悦ビ召見シテ時服佩刀ヲ賜フ為ニ盛饌ヲ設ケ其宰  
臣ヲシテ伴食セシム五平次飯ニ椀羹一椀ヲ喰了シ其餘  
ニ及バズ大夫鮮羞ヲ啜ルトヲ勸ム五平次曰ク四民飢渴  
シ老穉凍餒ス王侯ニ非ルヨリハ甘美ヲ食フ可カラズト  
云フテ食セズ  
明和中武藏相模上野三州荒饑ス奸民相集テ盜ヲ為ス富  
商ヲ劫奪シ民舎ヲ毀壞ス暴亂甚ダ多シ有司坊正之ヲ檢  
スレドモ其人ヲ知ラズ將サニ友山ガ家ニ及バントス一



人走テ至リ。大ニ其徒ヲ呼テ曰ク。是レ我が奥貫翁ノ居ナ  
リ。昔レ寛保ノ水災。翁在ルヲ以テ。我が祖父母兄弟ヲシテ  
生存ヲ得セシム。汝チ之ヲ知ルカト。衆大ニ駭キ。相與モニ  
顧ミテ曰ク。我儕庇恩ヲ報ズルノ力無シ。而シテ反テ虐ス  
ベケンヤト。門外ニ俯伏シテ去ル。故ニ其四隣。ナ之ガ為  
メニ暴亂ヲ免ガルト云フ。

櫻所子曰ク。奥貫友山ハ儒學ヲ以テ名ヲ得タル者ナリ。而  
シテ其爲ス所。尋常腐儒ノ得テ能スベキ所ニ非ズ。宜ナル  
哉。暴民ノ與貫翁ノ居ナリト聞ケバ。則チ俯伏シテ去ルニ  
至レル。吁。友山ノ如キハ。真儒ト謂フベキナリ。

第二十四 大黒屋善兵衛橋本某ヲ感悟セシメシ事  
江戸十軒店ノ絲綿舗ニ。家號ヲ大黒トイヒ。名ヲ善兵衛ト

稱スル者アリ。資産殷富ナレ。自ラ意ヲ家事ニ經セズ。利  
中ニ生レテ利ヲ脱シ。才識アリテオラ用弁ズ。故ヲ以テ恆  
ネニ黒蒼黃赤ノ色。修短寛窄ノ製ヲ錯誤シ。顧客ノ愠怒ヲ  
受ク。輒チ微笑シテ曰ク。僕稟性迂濶ナル。命ズルニ此煩瑣  
ノ役ヲ以テセラル。豈任用其人ヲ得ザルニ非ズヤ。自及シ  
テ之ヲ恕セヨト。顧客亦笑テ止ム。爲メニ折價スルヲ屢ナ  
ルモ。敢テ省セズ。亦一奇人ナリ。偶親家橋本某ナル者アリ。  
年猶ホ若フシテ父ヲ喪ヒ。放肆蕩散。檢束スルヲ知ラズ。  
娼妓ニ惑溺シ。亦家道ノ日ニ衰頹スルヲ省ミズ。其母頗ル  
之ヲ憂懼シ。親族ヲ招テ誠規シ。理義以テ之ヲ折キ。温言以  
テ之ヲ諭トス。善兵衛席ニ在リ。唯嘿坐シテ。煙ヲ喫スルノ  
ミ。未ダ始メヨリ一語ヲ置カズ。俯仰次伸シテ。衆ニ先ダツ



テ辭シ去ル。後チ一日、某來謝レテ曰ク、僕ノ愚蒙ナル、久シク親家ヲ累ハス。今ヤ曾非ヲ覺トル、懃悔スレ、及ブテ無シ。然リト雖、僕マサニ將來ヲ戒慎シ、以テ前過ヲ償ハント欲ス。可ナランヤト。善兵衛曰ク、甚ダ善シト。某復々襟ヲ歛メ、謂テ曰ク、嚮キニ妓ノ僕ニ要求スルニ春服ヲ以テセリ。僕過テ諾ス。追悔スレ、及バズ。苟モ言ヲ食ムデ果サミルハ、男子タルモノ、辱ナリ。僕ガ畢生ノ所願、唯此一事アル。自今以後、誓テ花柳ノ地ヲ履マザラン。善兵衛曰ク、信ニ然ラバ、又何ゾ不可ナラムヤト。某又曰ク、其約スル所ノ衣帶ハ云々ニシテ、染繡ハ云々ナリ。價約ネ五十金。伏シテ願クハ、子ノ擔當シテ之ヲ作シ、成ルノ日將サニ其直ヲ償ハントス。未ダ知ラズ肯許セラル、ヤ否ヤト。善兵

衛曰ク、是レ吾ガ業トスル所之ヲ辨スルニ於テ、何カアラシ。但、歳已ニ暮ル。恐クハ速カニ成リ難シ。悔夜以テ期ト為ス。何如ント。某欣喜拜謝シテ去リ、往テ妓ニ誇ラヒク。吾レ汝ヲ為メニ春服ヲ命ズト。已ニシテ除夕ニ至ル。夜マサニ半ハナラントス。未タ齋チ來ラズ。某恠ミ、數人ヲ差ハシテ之ヲ促ガス。善兵衛是ニ於テ衣ヲ分テ二帊ト爲シ、奴ヲシテ之ヲ負フテ至ラシム。某狂喜シテ帊ヲ發ケバ、棉衣二十、皆皂色ニシテ、橋本氏ノ章ナリ。某愕然トシテ措ク所ヲ失シテ曰ク、除夜ノ紛擾ナル。誤テ他物ヲ輸セシニ非ル無キヲ得ンヤト。善兵衛色ヲ正ハシテ曰ク、咄、汝ヲ父死シテ一作善無ク、色ニ荒サミ、産ヲ破リ、憂ヲ母氏ニ貽ス。何ハヤ、因テ名薄ヲ懷ヨリ出シ、之ニ示シテ曰ク、是レ皆ナ故舊



家奴ニ係ル、貧困支へズ、凍粟歳ヲ守ル者ナリ、吾為メニ春  
服ヲ製ス、速カニ人ヲ差ハレテ分給セヨ、且ツ一妓ニ衣ス  
ルハ、二十人ニ衣スルニ孰與レト、某茫然トシテ自失ス、復  
夕奈何トスベキ無ク、遂ニ其言ノ如クス、明日陸續來テ年  
ヲ拜シ恩ヲ謝シ、家章、鸚鵡班鷺列シテ、懽聲屋ニ溢シ、祥氣瑞  
光、意料ノ表ニ出ヅ、而シテ妓ハ則チ怨ミヲ鳴シテ之ト絶  
ツ、某始メテ感悟スル所アリ、遂ニ志ヲ改メテ、修教シ、家産  
稍々故ニ復セリトイフ。

櫻所子曰ク、世ノ淫靡ニ趨クヤ、情波欲濤ニ浮沈スル所ノ  
蕩子冶郎、其人ニ乏シトセズ、而シテ親朋ノ理義以テ之  
拆キ、温言以テ之ヲ論トスアリト雖、其迷雲痴霧ヲシテ  
解駁セシムルニ足ラザル、恰カモ庸醫ガ皮膚ヲ刺衝スル

ノ藥劑ヲ投ジテ、骨髓ニ淪漸スルノ病痼ヲ療セントスル  
ガ如シ、善兵衛ノ之ニ處スル人ノ意表ニ出デ、善ク敗ヲ轉  
ジテ功ト爲シ、昏ヲ回レテ明ト為サシム、猶ホ良醫ノ一劑  
ヲ投ジテ頓ニ回生起死ノ効ヲ奏シ、患者ヲシテ、肢体清穩、  
神氣爽快ナラシムルガゴトシ、顧フニ此巧妙ノ手段ヲ以  
テ、移シテ大事ニ施サバ、假令盤錯處シ難キニ逢フト雖、  
勢ヒニ因テ伎倆ヲ逞フスル、猶ホ庖丁ノ牛ヲ解クガゴト  
ク、綽然トシテ餘地アルヲ得ニ、奚ゾ管ニ妓ニ與フル者ヲ  
轉ジテ、家奴ニ與フルノ嫌除ニ止ランヤ、  
第二十五 釋月仙貪鄙ノ諷リヲ避ケザリシ事  
釋月仙ハ伊勢ノ僧ナリ、幼ニシテ剃度ス、性畫ヲ好ミ、遂ニ  
其妙ヲ極ム、名海内ニ噪グ、然カモ甚ク潤筆ノ資ヲ得ルヲ



欲ス、畫ヲ請フ者アル毎ニ、必ず先ヅ價ヲ論ジ、後チ筆ヲ起スニ至ル。是ニ因テ世其貧鄙ヲ毀ル。月仙顧ミザルナリ。一名妓アリ、其畫ヲ善クスルヲ聞キ、奴ヲシテ來テ之ヲ請ハシム。月仙先ヅ價ヲ論ズ、奴返リ告グ。妓曰ク、價ハ宜ク其欲スル所ニ從フ可キナリト。畫成ル。月仙親ラ携ヘ來ル。妓嫖客アルニ會ス。宴方ニ盛ナリ。乃チ月仙ヲ別キ席末ニ就カシメ、金若干ヲ攫ミ、席上ニ擲チ以テ之ヲ與ヘテ曰ク、金以テ畫ヲ買フナリ。噫、賣畫僧齒スルニ足ラズ、買フ所ノ幅掲タルニ足ラズト。是ニ於テ衣裳ヲ脱シ、進ムテ稠人中ニ立チ、自ラ其禪ヲ解キ、幅ニ代テ壁上ニ掲ゲ、因テ笑テ曰ク、雅軸ヲ獲ズト雖ヒ、亦佳禪ヲ獲タリト。一坐之ガ爲メニ目ヲ掩フ。月仙熟視シテ愧ル色無シ。後チ益其價ヲ貴フシ、其

獲ル所ノ金ヲ稱貸シ、遂ニ以テ巨富ヲ致ス。ト云々。後、畫僧大雅來リ宿シテ曰ク、水雲ヲ心ト爲シ、樹石ヲ樓ト爲ス。豈ニ鼻祖ノ教ニ非ズヤ。假令寺ヲ出デ、山ニ入ルヲ能ハザルモ、書畫利ヲ繳シ、以テ富ヲ致ス。何ソ銅臭ヲ嗜ムノ甚シキヤ。是豈ニ特リ和尚一人ノ汚辱ノミナランヤ。請フテ旃レヲ改メヨト。月仙曰ク、洵トニ然リ。抑モ予ハ畫ニ於ケル固ヨリ已ム可クシテ、已マバハ者蓋シ以ヘアルナリ。予孤ニシテ貧シ、戚族拉直テ予ヲ茲寺ニ投ズ。師之ヲ憫ミ、卵ニシテ翼ス。師ニシテ父母ノ恩ヲ兼ヌ、寂スルニ臨ミ、命シテ以テ寺主ト爲ス。水雲ヲ心ト爲シ、樹石ヲ樓ト爲ス。能ハザルナリ。往年ノ凶荒、茲ハ土特ニ甚シ。餓莩相枕シ、道瑾相望ナリ。因テ意フニ、書畫ハ玩物ナリ、而シテ之ヲ愛スル



必不貧者、非不今ヨリ以往、忍辱シテ揮灑シ其潤筆ヲ蓄  
へ積ムニ歲月ヲ以テセバ、庶幾クハ以テ少ク凍餓ヲ賙ハ  
スニ足ランカ幸ニシテ請フ者陸續トシテ門ニ及ブ之ヲ  
人ニ托シ積ムデ五百金ヲ得乃チ山田奉行ニ屬シ以テ數  
村ノ凶荒ニ充ツ則チ宜ク己ムベシ然レ氏又謂ラ達山  
險隘ニシテ來テ大廟ヲ拜スル者之ヲ病ム先師恆ニ以  
テ憂ト爲ス乃チ爲メニ揮灑シテ二百餘金ヲ得乃チ因テ  
功ヲ興シ險以テ夷カニ隘以テ豁カニシテ行旅之ヲ喜ビ  
謳歌シテ過ク則チ將サニ筆硯ヲ燒カントス此ヨリ先キ  
先師將サニ堂宇ヲ修繕セントシ果サズシテ逝ク今ヤ堂  
宇頗ル傾キ柱楹益蠹ス因テ又將サニ其志ヲ繼ガントス  
予已ニ老タリ成否必シ難シ然ルト雖モ今此ニ從事ス軀

猶亦頑健シテ財モ亦稍聚ル要スルニ二年ヲ出デズシ  
テ將サニ志ヲ償ハントス此レ余ノ銅臭ヲ嗅デ厭ハザル  
所以ナリ此一事實ヲ了スレバ將サニ心ヲ洗ヒ真ヲ修シ定  
後、真諦ニ歸セントス爾時財ハ即チ乾屎橛ノミ適スレ  
バ則チ揮フ適セザレバ則チ已ム銅臭ニ何アラシヤト大  
雅大ニ感シ拜謝シテ去ル  
櫻所子曰ク凶荒ニ備ヘ道途ヲ修夷スル豈ニ濟世ノ美舉  
ニ非ズヤ志ヲ繼デ堂宇ヲ修補スルハ師長ノ恩ニ報ズル  
ナリ而シテ此濟世繼志ノ爲メニ忍辱舍垢以テ匪勉拮据  
能ク其志願ヲ満足ス月仙ノ事洵ニ多トスルニ足ルモノ  
アリ世ノ僧徒ノ身ニ錦繡紫紅ノ衣ヲ纏ヒ口ニ因縁因果  
ヲ説キ之ヲ望メバ儼然トシテ活佛ノ如クナルモ其心裡



ヲ察スレバ營名貪利至ラザル所無ク愛憎嫉妬修羅ノ闘  
諍ヲ事トスルニ非レバ則チ有財餓鬼タリ常見ノ外道ノ  
部類ニ非レバ則チ斷見ノ魔王ノ眷屬タル輩ニ比スレバ  
月仙豈ニ日ヲ同フシテ語ル可キモノナランヤ

第二十六 春夫八藏カ達ナル事

春夫八藏ハ信濃國某村ノ農夫ナリ信濃ノ俗タル毎歲秋  
冬ノ交壯者相誘シテ江戸ニ來リ自ラ鬻キテ奴トナリ春  
來南畝ニ事アルニ及ンデ去ル而シテ都門ノ繁華ニ慣レ  
顧戀シテ還ラズ遂ニ都籍ニ入ル者往々ニシテ在リ八藏  
始メ郷人十餘輩ト俱ニ來リ而シテ亦留ル者四人八藏其  
一ナリ俱ニ連房ヲ淺草福富坊ニ積シテ居ル履齒ヲ補フ  
者大車ヲ挽ク者等各自業ヲ異ニス八藏ハ則チ人ニ役セ

ラレテ米ヲ舂ク孜々枕ヲトシテ各其勤メニ服ス而シ  
テ或ハ酒ヲ飲シ或ハ賭博シ或ハ花柳ニ遊蕩ス其嗜好ヲ  
一ニセズ隨テ獲レバ隨テ費シ半文錢ヲ宿メズ八藏獨リ  
衣食ヲ損ジ嗜欲ヲ忍ビ意ヲ一ツニシテ貯蓄ス錢ヲ積ム  
テ銀ニ換エ銀ヲ化シテ金ト為シ日ニ積ム月ニ化シテ費  
煩ル富ム暇アレバ則チ素ヨリ出シテ青眼欣如摩挲シテ  
以テ樂ム儕輩其所為ヲ笑フ一日之ニ謂テ曰ク夫レ人ノ  
筋骸ヲ勞シ能ク耐工難キニ耐工忍ビ難キニ忍ブ者豈他  
アランヤ財ヲ獲テ以テ嗜好ヲ遂ゲントス養生延年ノ道  
乃チ爾リ然ラズンバ金ヲ積ムテ星斗ヲ撐フルモ亦何ノ  
用ユル所ゾ日ノ獲ル所夜ハ則チ散ジ盡シテ日出デカ  
作シ錢ヲ攫ムデ還ル身アリ錢アリ樂ムデ以テ歲ヲ送ル



ハ此し太平雨露ノ恩吾儕ノ郷ヲ離レテ都ニ宅スル所以  
ナルノミ。今汝チハ貯蓄シテ用キズ知ラズ何ノ意ゾヤ。盍  
ゾ速カニ故郷ニ歸ラザルヤトハ藏笑テ答ヘズ然レ氏竟  
ニ其為ス所ヲ改メズ。儕輩竊カニ指斥シテ曰ク諺ニ所謂  
痴ヲ醫スル藥無シトハハハ。謂ナリト既ニテハ藏疾ニ  
寢ネ。荏苒月ヲ踰エテ起色無シ。一日三人謂テ曰ク同郷相  
長ジ。今同爨共食ス情兄弟ニ同シ。今疾日ニ漸ム吾儕甚ダ  
之ヲ危ブム。若シ不幸ニシテ起タズニバ其貯フル所ノ金  
ハ如何ガ處措セシ。請フ今ニ及ムデ之ヲ言ヘ。ハ藏笑テ曰  
ク人各嗜好スル所アリ。此ヲ以テ心身ヲ勞苦ス用ヒテ以  
テ其欲スル所ヲ遂グルニ及ベバ則チ洒然トシテ以テ樂  
ミ愉然トシテ自適ス其跡ハ同ジカラザルモ其樂ミト爲

スハ則チ一ナリ要スルニ各其樂ミヲ樂ムノミ予ソ積ム  
デ用キズ玩弄以テ自ラ娛ム是レ我が無上ノ樂ミノミ其  
然ル所以ハ則チ吾ト雖凡知ル能ハズ今橐中ノ物ノ如キ  
ハ吾ガ平生樂ミタル所ノ數ナリ又何ゾ顧戀セシヤ。豎ニ  
謝シ骸ヲ埋ムルノ餘一ニ之ヲ汝ガ曹ノ處分ニ委タヌ以  
テ飲ミ以テ賭シ以テ妓ヲ買ヒ請フ焉ヲ用キ以テ其樂ミ  
ヲ樂メヨヤト是ニ於テ儕輩愕然トシテ曰ク達斯ノ如キ  
人ハ則チ凡人ニ非ズ聖人ナリト幾クモ無クシテ歿ス一  
ニ其言ノ如クセリト云フ。

櫻所子曰ク嗚呼達ナル哉ハ藏ヤ凡ソ挽夫舂夫ノ人ニ雇  
役セラル者概ネ隨テ得レバ則チ隨テ散ズ人烟稠密ノ  
都會ハ貧民モ亦夥多ナル者他無シ裏店横坊皆斯輩ノ巢



窟タラサル無キヲ以テナリ。然レバ則チ都會ノ繁華十ノ  
六七ハ斯輩ヲ以テ組織セラル、トイフモ可ナリ。故ニ米  
價ノ沸騰、疾疫ノ流行アル、其飢渴ヲ訴フル者ノ多キ、亦都  
會ヲ以テ最第一トス。即チ得ルニ隨テ散ジ、亦一錢ヲ貯蓄  
スルコトヲ知ラザルヲ以テナリ。聞ク嘗テ都下ノ職工ハ、經  
宵ノ金ヲ用弁サルヲ以テ、江戸兒ノ氣象ヲ誇レリト。然ル  
ニハ、藏眼ニ一丁無ク、亦理ヲ知り道ヲ學ブモノニ非ズシ  
テ、善ク浮疎ノ風習ニ薰染セラレズ。儕輩ノ嘗笑ヲ顧ミズ、  
殆シ下愚ノ移ラザル者ニ似タリ。而シテ其平素貯蓄ス  
ル所アルヲ以テ、鑿ニ謝シ、散ヲ埋ムノ費ヲ辨ズルニ餘リ  
アルノミナラス、其餘澤以テ儕輩ニ及ボスニ足ル、且ツ夫  
レ、自ラ起タサルヲ知ルヤ、平生愛玩スルニモ似ズ、毫モ執

着ノ念無シ。恰モ岡野左内ト其臭味ヲ同フスル、亦奇ナラ  
ズヤ。叔也ノ一語、其胸襟ノ洒々落落タル、左内ガ舊券ヲ櫃  
ト、モニ焚如ニ付セシニ讓ラズ。視ヨ得ルニ隨テ散ジ、以  
テ口腹耳目ノ嗜好ヲ遂ゲテ、儲フルヲ知ラズ。疾病事故ア  
ルニ際シ、鑿藥ノ求ムベキ無ク、埋葬吊祭ノ費無キハ、貧民  
ノ常態ニメ、日夜逐々トノ利ヲ起ヒ、銖積寸累シ半錢以テ  
人ニ貸サズ、一毛以テ人ニ利セズ、口ニ肉セズ、體ニ絹セズ。  
冥然トメ貨財ヲ守リ、以テ生涯ヲ送了シ、續ヲ屬スルニ至  
ル迄、顧惜眷戀ノ措カザル者ハ、守錢奴ノ情况ナリ。八藏ヲ  
シテ此貧者ノ散ジテ畜フルヲ知ラザルト、守錢奴ノ積ム  
テ用ユルコトヲ解セザルトノ情狀ヲ評セシメバ、必ズ曰ハ  
ン、痴ヲ鑿スルノ藥無シト。噫、



第二十七 狂生田某ヲシテ禍ヲ免カレシメシ事

狂生某トイフ者アリ、何許ノ人ナルヲ知ラズ、或ハ曰フ陸  
 奥ノ人ナリト、幼ニシテ父母ヲ喪ナヒ、依托スルニ門無ク、  
 東西流離スル十數年、遍ネタ大都通邑ヲ遍歷シ、餓ユレバ  
 則チ人家ニ沿テ酒食ヲ乞フ、醉ヘバ則チ蹠跚歌呼ス、人呼  
 テ狂生トナス、因テ自ラ以テ名トス、年二十江戸ニ入テ昌  
 平鬻ノ傍ニ露卧シ、日ニ絃誦ノ聲ヲ聽キ、欣然トシテ神會  
 スルノ色アリ、一旦翻然トシテ人ニ語テ曰ク、我モ亦人ナ  
 リ、四肢五官一モ具ハラザルヲ無シ、天ノ我ニ與フルヲ渥  
 キ是ノ如シ、我ハ則チ狂生ヲ以テ終フル、可ナランヤト、乃  
 チ巨室大賈ニ干謁シ、薪水ヲ操ルヲ請フ、人ミナ生ノ狂ヲ  
 恐レ敢テ許サズ、生嘆ジテ曰ク、都人士ハ皆盲聾ノミト、去

テ常野ノ間ニ彷徨ス、野州宇都宮ニ、豪農田某ナル者アリ、  
 除タニ會ス、主翁出テ、通ヲ督ス、忽チ一人ノ蓬頭藍面瘦  
 羸骨立セルモノ、其後ヘニ從フ、大ニ駭キ以テ窮鬼トス、叱  
 シテ曰ク、去レ其人一歎一笑シテ曰ク、嗚呼、我瘁ム宜ナル  
 カナ、翁ノ目スルニ窮鬼ヲ以テスル、翁モ亦禍福轉換ノ機  
 ヲ知ルカ、窮極テ富生ジ、富極テ窮來ル、然ルカハ翁ノ富未  
 ダ恃ムベカラズシテ、我ノ窮悲ムベキニ非ズ、天下固ヨリ  
 其服ヲ縵縷ニシテ、其心ヲ錦繡ニシ、形チノ瘦セテ智ノ肥  
 タル者アリ、其皮ヲ豹ニシ、其質ヲ羊ニシ、財ニ富ムテ才ニ  
 貧キ者アリ、今翁ノ眼、表裏ヲ辨セズ、人鬼ヲ判セズ、惑ヘル  
 ノ甚キ者ト謂フベシ、翁モ亦聾盲ノ徒ナル哉ト、マサニ浩  
 歌シテ去ラントス、翁其言ヲ奇トシ、引テ與モニ歸ル、其門



ニ及ビ翁大呼シテ曰ク我福神ヲ得タリト家人皆出迎フ  
レバ則チ乞食狂生ナリ蓋シ生屢米錢ヲ翁ノ門ニ乞フ而  
シテ翁ハ毎ニ深奥ニ在テ知ルニ及バザリシナリ家人交  
翁ヲ尤ガム翁可カズシテ曰ク彼レハ佯狂者ナリ豈ニ真  
ニ乞食ノ徒ナランヤ苟モ我が用ヲ為サバ以テ我家ノ福  
ナラズヤト是ヨリ厚ク衣食ヲ給シ之ヲシテ諸雜事ヲ理  
メシム生日夜拮据シテ精敏人ニ過ク事遲滯無ク家政整  
肅ス隣里相告ゲテ曰ク田氏佳僕ヲ得タリト是時ニ當リ  
幕政衰頽シ紀綱弛解ス内憂外患兢ヒ起ル之ニ加フルニ  
年穀實ラズ物價昇騰シ飢餓ニ苦ムノ民所在ニ盜ヲ爲シ  
四境騷然タリ生亂形已ニ成ルヲ知リ一日主翁ニ説テ曰  
ク禍亂ノ機朝夕ヲ測ラズ而シテ主家素封ヲ以テ聞ユ宜

ク速カク貯蓄ヲ散レテ恩義ヲ郷人ニ結ノキナリ夫レ  
一齋ノ肉委レテ空庭ニ在ル貪蠅蠓蟻相聚テ之ヲ争フギ  
ハ漿爛セサルコト無レ苟モ主家ニレテ孤立セバ猶ホ齋肉  
ノ委テ庭ニ在ルカゴトニ郷人ノ貪蠅蠓蟻夕ラサルヲ  
欲スレト得ベケンヤト主翁頷ル悟ル乃チ貸券數百金千  
圓穀千斛ヲ散レ以テ窮孤ヲ賑恤ス幾クモ無ク水戸藤  
田黨尊攘ヲ唱ヒ兵ヲ常野ノ間ニ起ス執レ風雨ノ如ク豪  
農大賈多ク劫掠セラル而シテ田氏獨ノ德望ヲ以テ免カ  
ル翁大ニ喜ムテ曰ク狂生ハ果シテ是レ我が家ノ福神ナ  
リト  
櫻所子曰ク今ノ所謂貸殖家多クハ刻薄ニレテ厘毛ノ末  
利ヲ争フヲ知ルト雖モ慈善ノ何事タルヲ知ラズ其貧者



ヲ視ルコト犬羊ノ如クス。動モスレバ輒チ曰ク、彼レカ愚ナルコト斯ノ如シ。故ニ貧ナリト、貧者豈ニ盡ク愚ナランヤ。種種ノ困難ヲ經種々ノ不幸ニ罹リ、才智アリ徳操アル者ニシテ途窮ヲ哭スルアリ。古來其例多シ、而シテ貧人ノ富家ヲ視ルコト仇敵ノ如クスル者モ、亦其心ニ嫉妬ヲ懷クナキニ非ズト雖、氏至竟富家ノ恩ヲ施サズシテ、威ヲ用ユルヲ先キトシ、出納ニ吝ニシテ兼併ニ急ナルニ由ルナリ。故ニ亡頼ノ徒貧民ヲ嗾シテ、竹槍席旗ノ暴舉ヲ企ツルガ如キ事アルニ際セバ、則チ富農大估概、不之カ魚肉トナルヲ免ルレズ。況ヤ兵亂ニ於テヲヤ、若シ富者ニシテ其郷閭ノ貧人ヲ待ツ親戚子弟ノ如クシ、恆ニ恩惠ヲ施スアバ、貧人亦頑石木偶ニ非ルナリ。何ゾ應分ニ報酬スルコトヲ思ハザ

テニヤ

櫻所子曾テ之ヲ古老ニ聞ク。昔シ某地ニ一豪農アリ、素封ノ富州郡ニ比無シ、而シテ其倉庫一モ鎖鑰無ク、夜戸ヲ扃サズ。然ル所以ハ、接近數十ノ村落、一人トシテ其恩惠ニ浴セザル者無キヲ以テ、之力萬一ニ報スルガ爲メニ、村民相約シ、風雨寒暑ヲ論セズ、毎夜十數人來テ宿衛シ、家ノ四邊ヲ警護ス。是固ヨリ村民自ラ爲ス所ニシテ、倚托セラレタルニ非ルヲ以テ、暮ニ來リテ晨ニ去リ、敢テ其家人ヲシテ知ラシメズ。此ノ如クニシテ、渝ハラザル者數世ニ及ブ。是倉庫及ヒ筐笥等、スベテ鎖閉スルヲ須キガル所以ナリト、其恩ヲ閭里ニ布クハ、深キ想フ可キナリ。然ルニ之ニ反スルノ一話アリ。昔シ北陸ニ一豪農アリ、村民數百人連盟シ、



竹槍隊ヲ成シテ其家ヲ圍ミ、吶喊火ヲ放チ、驚走狼狽スル所ノ主翁及ビ家族七人ヲ捕ヒ、叢槍亂刺シテ悉ク之ヲ殺シ、踊躍シテ去ル官即チ其罪魁ト人ヲ逮捕シテ其問ニ磔スト夫レ衆ヲ煽動シテ人ヲ殺シ家ヲ燬ク其首魁タル者固ヨリ嚴刑ヲ免ガル可カラサルヲ知ラシテ而シテ斷乎此慘虐ノ事ヲ為シ各自ノ生命ヲ愛シマズ亦其父母妻子ノ悲痛ヲ顧ミサル者豈ニ故無シトセシヤ必ヤ平素ノ所為富有ハ力ヲ以テ貧人ヲ待ツハ太夕刻薄ナルニ激スル所アルニ由ルナル可シ此ノ行跡ヲ以テ前ノ事實ト對照ヒバ猶ホ越歷氣ノ消積ニ極ノ如シ仁暴ノ變化シテ殃福處ヲ異ニスルヲ視ルニ足レリト此言固ヨリ傳聞ニテ耳底ニ存スル所ヲ記スルノニ其年時ト姓氏トノ如キハ既

ニ遺忘セリ然レモ今田某ガ德望ヲ以テ藤田黨ノ劫掠ヲ免ガレ果シテ狂生ノ福神タリシトヲ驗知セシノ條ヲ録スルニ及ビ讀者ヲシテ温公ガ陰德ヲ冥々ノ裡ニ積ムヲ以テ福祉ヲ子孫ニ貽スノ長策トセシ言ノ妄ナラザルヲ感發セシムルノ一端ニ供センガ為メ茲ニ附記ス知ラズ世ノ富者果シテ首肯スルヤ否ヤ

第二十八 新見屋新右衛門少女ヲ救ヒ禍ヲ免ガレシ事

新見屋新右衛門ハ野州宇都宮ノ米賣ナリ未ダ其姓ヲ詳カニセズ億料奇中大ニ殷富ヲ致ス已ニ老タリ親戚之ヲ規シテ曰ク今乏シキ所ノ者ハ財ニ非ズ智ヲ役スルヲ度ニ過グルハ攝生ノ道ニ非ズ請フ意ヲ商事ニ絶テ優遊以



テ歳ヲ卒ヘヨト、新右衛門曰ク、大ニ善シ、但今秋將サニ大  
贏利アラントス、見ル所決シテ錯誤セズ、此一着ヲ了シテ  
後チ、局ヲ歛メテ間ニ就カント、乃チ江戸ニ抵リ事ニ從  
果シテ數百金ヲ獲ス、笑テ曰ク、吾必ヨリ老ニ至ルマデ、  
矧トシテ賈ニ服ス、未ダ賞テ放意興ヲ遣ラズ、吾將サニ畢  
世ノ愉快ヲ極メ、索ヲ垂レテ還ラントス、乃チ書ヲ報シ、親  
姻故舊ヲ招キ、拉シ以テ花ヲ賞シ、月ヲ弄シ、演戯ヲ觀、北里  
ニ遊ハ、往ク所絲肉涌起シ、銅臭人ヲ醉ハシム、一日永代橋  
ヲ過ク、時ニ晩間、五色辨ゼズ、人アリ將サニ踊テ水ニ投セ  
ントスル者、如シ、電行レテ之ヲ掣ル、少女ナリ、將サニ脱  
投セントス、緊抱レテ放タズ、曰ク、何ノ故ゾ、泣テ曰ク、理死  
セザルヲ得ズ、願クハ遣放セヨト、之ヲ諭シテ曰ク、諺ニ曰

久膝猶ホ相謀ルニ足ルト、予豈膝ニ勝ラズヤ、蓋ソ其實ヲ  
語ラザルト、乃チ謝シテ曰ク、妾幼ニシテ父ヲ喪ヒ、家道稍  
落シ、母ハ親家ニ寄食シ、妾身ヲ鬻グ、五年某家ノ婢ト爲  
ル、未牌主翁ノ命ヲ奉ジ、金三十兩ヲ齎ラシ、諸レヲ某氏ニ  
致ス、途ニシテ之ヲ失フ、索搜スレ、凡得ズ、贖ハンカ資無シ、  
實ヲ告ゲンカ、家貧レケレバ必ズ曰ハン、粗瞻虚捏シテ、此  
匪事ヲ作スト、身死スレバ、則チ白カナリ、死ヲ決スル所以  
ナリ、但、明年期滿ツ、阿母之ヲ待ツ、日年ノ如シ、妾ニシテ死  
ス、阿母ノ駭悲如何ト爲ルヤ、涕泗雨ノゴトク下ダル、新右  
衛門多方之ヲ論シ曰ク、三十金生ヲ買フハ、廉シ、吾將サニ  
之ヲ買ハントスト、與フルニ金ヲ以テシ、且以テ教ハテ曰ク、  
速カニ還リ事ニ託シテ、遲緩ヲ謝セヨト、女感涙固辭ス、強



テ之ヲ與ス。姓名里居ヲ問ヘバ。笑テ曰ク。余ハ田舎羽ナリ。ト告ゲズレテ去ル。後チ數年親家年少三輩ヲ携ヘテ。八幡祀事ヲ深川ニ觀ル。山車巧ヲ争ヒ。歌舞新ヲ競ヒ。觀ル者都鄙ヲ傾ク。永代橋ニ至ルニ及ビ。觀者填溢シ。肩相摩シ。踵相躡シ。歩地ニ着カズシテ。自ラ進退ヲ爲ス。滿街狂ノゴトシ。時ニ女アリ。來テ袖ヲ牽テ語ル。新右衛門曰ク。似タル者ヲ誤認セシニ非ルカト。肘ヲ奮テ顧ミズ。女緊抱シテ放タズ。新右衛門大ニ怒リ。喝シ且ツ曰ク。何ゾ不敬亡狀ナル。年少輩其レ我ヲ何トカ云ハント。時方ニ喧聒。言語達セバ。唯。吻動キ色變ズルヲ視ルノミ。女力ヲ極メテ牽引ス。遂チ年少ト相失シ。橋側ノ茶肆ニ入ル。女謝シテ曰ク。君豈ニ我方恩人ニ非ズヤ。某年月日。此橋上女ヲ救ヒシ事ヲ記スルヤ否。

ヤト。新右衛門頭ヲ傾ク。鬢眉シテ曰ク。今ニ五年。因テ往事ヲ叙シ曰ク。妾還リ實ヲ以テ主翁ニ復シ。金ヲ奉ジテ之ヲ還ヘス。主翁咨嗟之ニ久フシテ曰ク。塗人尚ホ然リ。吾何ッ其金ヲ受クルニ忍ビンヤ。然リト雖。臣未ダ之ヲ返スニ由シアラズ。吾將サニ權ニ藏メ以テ俟ツアラントスト。期滿ルニ及ビ。其金ヲ把テ妾ニ賜ベ曰ク。用キ以テ母子生活ハ資ト爲シ。永ク其鴻惠ヲ存セヨト。推辭スレ。臣允サズ。乃チ拜受シテ歸リ。具サニ阿母ニ告ゲ。相對シテ泣ク。當時自ラ誓テ曰ク。此恩ヲ忽略スルハ人ニ非ズ。昏黑間眸ヲ凝ラシテ諦視シ。粗風狼年齒ヲ認メ。之ヲ心肝ニ刻シ。常ニ神佛ヲ祈リ曰ク。一タビ其人ヲ觀。口此恩ヲ謝スルヲ得シ。何許ノ人ナルヲ知ラズト雖ドモ。安シゾ知ラン。親故ノ此間ニ在



ルアツテ重ネテ橋上ヲ經過スル無キヲ因テ阿母ト與  
モニ謀リ、既フ所ノ金ヲ以テ茶肆ヲ此ニ買ヒ茶ヲ賣リ以  
テ活ク且ツ日夕注目シテ之ヲ求ム、今ニシテ果シテ之ヲ  
覩ルヲ得タリ、何ノ喜ビカ馬レニ尚ヘン、且ツ泣キ且ツ語  
ル言未タ畢ハラザルニ、橋身斷裂シ相推シテ溺ル、須臾ニ  
シテ浮屍川ヲ掩ハ踏ムテ濟ルベシ、携フル所ノ三人モ亦  
溺中ニ在リ、新右衛門獨リ免ガル、ヲ得タリト、則チ文政  
四年丁卯秋八月十五日ノ事ナリ。

櫻所子曰、白居易ノ詩ニ、貧始覺錢靈ノ句アリ、世上一擲  
萬金情ヲ含ムテ片言無キノ豪富アリト雖凡亦僅カニ數  
十金、若クハ數金ノ爲メニ、父母凍餒シ、兄弟妻子離散シ、身  
容ル、ニ地無ク十尺ノ布以テ其頸ヲ禁シ、數寸ノ菜刀以

テ其胸ヲ割テ死スルニ至ルアリ、誰カ豈ニ之ガ爲メニ惻  
然タラザランヤ、然リ而シテ世ノ浪費ヲ爲ス者、千金ヲ拋  
チ、而シテ券ヲ斗鍾ニ折ク能ハザル、滴々皆是ナリ、新右衛  
門卒然トシテ三十金ヲ路人ノ爲メニ拋チ、以テ其死ヲ拯  
ス、真ニ少女ノ爲メニハ、神靈帝ナラザルノ恩ヲ施コシ、而  
シテ徳ヲ吞ムデロセザル、豈惻隱ノ至レル者ニ非ズヤ、亦  
頼テ以テ漂溺ヲ免ガル、知ル可シ天ノ報應、昭然トシテ分  
明ナルヲ、彼主翁ナル者、亦厚誼ニ感奮興起シ、金ヲ推シ  
テ之ニ與フル者、及ビ女ノ日夜感刻、用意周到、久フシテ衰  
ヘザル者、皆頑ヲ醒シ、懦ヲ立ツルニ足ル、抑モ米賈ハ日ニ  
贏輸ヲ争フ、賭ト殊ナル無キ者ナリト雖凡、新右衛門カ女  
ノ生命ヲ買フノ餘カアル者他無シ、其少ヨリ老ニ至ルマ



デ。砒々トシテ賈ニ服シ、故意興ヲ遣ル、丁ヲ敢テセザルニ由ル。若シ夫レ其勤メニ倦メバ、則チ故意興ヲ遣ルヲ常トスル輩、囊底空罄シ、親姻故舊ノ急ヲモ救フ能ハズ、何ゾ患ヲ路人ニ及ボスノ餘裕アラシヤ、嗚呼、貨財ノ用タル、以テ人ヲ活スベク、以テ人ヲ殺スベク、以テ財貨山積スルノ富ヲ爲スベク、以テ勇士猛卒ヲ使役スルノ強國タル可シ、而シテ其靈ニシテ神ナル作用ハ、赤貧者ニシテ、後チ明驗シ得ルモノトス。此神ニシテ靈ナル貨財ヲ以テ、嗜欲ノ爲メニ徒消スルヲ知テ、産業ヲ興シ、學藝ヲ研シ、窮乏ヲ賑救スルノ用ニ供シテ、功益アルヲ知ラザル者、恰カモ龍泉太阿ヲ以テ、菜根ヲ截ルガ如シ、思ハズンバアル可カラザルナリ。

第二十九 山中某賑恤ヲ以テ老境ヲ慰メタル事

下總ノ入山中某ハ、貧賤ノ家ニ生レ、辛苦勤勉シ、家ヲ興ス。初メ四五圓ノ資本ニ過ギズ、而シテ齒耳順ニ垂ニトスルニ至テ、家産益昌ニシテ、積累巨萬ニ至ル。其人ニ貸與スル者、幾萬金ナルヲ知ラズ、利子歲入、亦數千金、某入ニ語テ曰ク、資産既ニ足ル、亦何ゾ殷殖ヲ求メシヤ、心ヲ賑窮ニ存シ、以テ老境ノ娛樂ト爲ス可キノミト、櫻所子曰ク、世ノ暴カニ富ム者ヲ視ルニ、初メ以為ク千金ヲ獲レバ、則チ足ルト、既ニ千金ヲ獲レバ、則チ萬金ヲ期シ、萬ニ至レバ、則チ億ヲ期ス、豁豁ノ欲底止スル所ヲ知ラズ、念ヲ累サネ慮リテ積ミ、一身恆ニ利ノ驅役スル所トナリ、安キ時アルヲ無シ、何ゾ人ノ窮乏ヲ賑恤スルニ違アラン



ヤ而シテ俄然トシテ産ヲ傾クレバ憂心快鬱トシテ解ク  
ル時無ク然ラザレバ死シテ蕩子ノ為メニ糜散セラレン  
ノミ是レ猶ホ富ムト雖氏貧シキガ如ク自ラ足ルヲ知  
テ心ヲ賑窮ニ存スル山中氏ノ如キ富有ニ素シテ富有ヲ  
行フ者ト謂フ可キナリ

第三十

菊池孝兵衛儉朴ニシテ窮乏ヲ憫ミシ事

菊池孝兵衛ハ野州宇都宮ノ商賈ナリ家號ヲ佐野ト曰フ  
資財饒裕ニシテ支店ヲ各處ニ置ク孝兵衛入トナリ瀟洒  
吟域ヲ設ケズ賓客堂ニ滿ツ詩酒談笑毫毛倦色無ク然レ  
氏自ラ奉ズル儉朴ニシテ其常用ノ饌具概ネ漆器ノ粗糲  
ナル者タリ其無用ニ奢ラザルハ率ネ此類ナリ嘉永癸丑  
己後國家多故幕府政ヲ失フ孝兵衛以為ク世變測ルベカ

ラズ宜ク田圃ヲ闢キ桑麻ヲ植工以テ安心ノ地ト為スベ  
シト乃チ下野絹川ノ沿岸ナル岡本桑島ノ西村荒蕪ノ地  
ヲ相テ草萊ヲ披キ溝洫ヲ疏シ窮民ヲ移シ糧食及ビ農具  
ヲ支給シ業ヲ安政乙卯ニ起シエヲ文久辛酉ニ竣ハル良  
田ヲ得ル二百八十町民家ヲ得ル五十四戸人ヲ得ル三百  
三十七口號シテ菊池村ト曰フ孝兵衛マタ慷慨國ヲ憂ヒ  
數千金ヲ費シテ四方有志ノ士ニ給シ遂ニ大橋順藏等ト  
獄ニ下タルニ及ベリト孝兵衛天資忠厚ニシテ窮乏ヲ憫  
ム飢渴ノ飲食ニ於ケルガ如クス其宇都宮ニ在ル夜ニ衆  
ニ僕ヲ率キ潛カニ貧戶ヲ窺ヒ金ヲ投ジテ去ル人其誰カ  
ルヲ知ラズ此ハ如クスル者數ナリトイフ  
櫻所子曰ク富商大估ニシテ詩酒談笑ヲ好ム孝兵衛ノ如



キ者ハ則チ之レアリ、其自ラ奉ズル儉朴ナル、孝兵衛ノ如  
キ者、亦間之レアリ、而シテ豫メ世變アルヲ知リ、一身ノ計  
ヲ爲シ、若干ノ窮民ヲシテ産業ヲ得セシメ、又以テ國家ノ  
爲メニ一利ヲ起スガ如キハ、商估中見ル能ハザル者タリ、  
況ヤ窮乏ヲ憫卹スル、飢渴ノ飲食ニ於ケルガ如キ、慷慨國  
ヲ憂ヒ、有志ニ資給スル如キニ於テヤ、産ヲ興シ業ヲ殖  
スルニ汲々タル者、今日其人ニ乏シキニ非ルベシト雖、氏  
豪商大估中、果シテ孝兵衛其人ノ、衆美ヲ兼ネ備フルガ如  
キ者アリヤ、蓋シコレアラン、未ダ之ヲ見ザルナリ、

第三十一 川北梅山儉素自ラ守ル事

梅山ハ伊勢ノ人ナリ、夙トニ才學文章ヲ以テ、拙堂ノ門ニ  
名アリ、其學ニ在ル數年、風晨月夕、興來レバ、則チ友ヲ呼ビ、

園蔬ヲ摘ミ、藜苳ヲ烹テ同ク斟シ、議論ヲ上下ス、後チ津藩  
ノ教官トナル、維新ノ始メ、徵サレテ史官ニ任ズ、其故舊之  
ヲ聞キ以爲ク、必スヤ石樓鐵柱、婢妾前ニ滿チ、賓客沓至シ  
テ、門市ヲ成シ、復タ清儉ノ舊、梅山ニ非ルベシト、而シテ一  
日、其家ヲ過クレバ、則チ門庭蕭然トシテ、人跡ヲ絶ス、梅山  
剥啄ノ聲ヲ聞キ、驚喜出テ迎シ、手ヲ把テ、堂ニ上ボル、蘭席  
筠榻、圖書山積ス、宛然タル、儒士ノ居ナリ、其酒ヲ呼フ、小鮮  
半盃、蔬筍滿盤、供給淡如ナリ、乃チ曰ク、吾毎ネニ退食、賓客  
ヲ謝シ、儉素自ラ養フ、蓋シ舊ヲ忘レザルノミ、是ヲ以テ、俸  
餘積ム所、亦以テ殘年ヲ養フニ足ルト、是ニ於テ、其前日想  
像、梅山ヲ視ルノ、淺キヲ悔サタリシト、梅山唯家ヲ治ムル  
ノ儉素ハ、ハナラズ、公ニ奉ズル亦然リ、其太政官ニ在リ、官



中ハ會計ヲ總ブルヤ冗費ヲ省フク用度ヲ節シ竹頭木屑ト雖亦徒ラニ用キス同僚其能ク職任ニ勝ムルヲ稱セリトイフ明治十年ノ春朝廷經費ヲ節シ官員ヲ減ス梅山與カレリ乃チ人ニ謂テ曰ク吾老テ勤ムニ倦ム今日綬ヲ解ク實ニ優恩タリ宜ク文酒風流ヲ以テ斯生ヲ終ラズト其園中ノ書樓ヲ名ケテ夢清トイフ蓋シ姚武功ガ休官夢正清ノ句ニ取ルナリ

櫻所子曰ク王政維レ新タニシテ封建ヲ廢シテ郡縣トシ武家ノ常職ヲ褫ギ賦兵ノ法ヲ定メラレシヨリ恆産無キノ士族所在ニ之レアリ其官途ニ奔競シ門ヲ掃ヒ壁ヲ拜スルモノ千百輩ナラズ既ニ其攀援シ得ルニ至テハ衣服居宅ヲ華美ニシ聲色耳目ヲ悦バシメ奢侈至ラザル無ク

一朝之ヲ失ハバ忽チ凍餓ヲ支フルニ術無ク月ヲ帖レ尾ヲ搖カシ天憐ミヲ乞フ者アリ悲憤慷慨急カニ賞生ノ口吻ヲ學ブアリ亦醜ナラズトヒズ而シテ纓ヲ濯ヒ冠ヲ掛ケテ後チ悠游自適風月ヲ嘲罵シ山水ニ吟嘯スル梅山其人ノ如キ者果シテ幾人カアリシヤ思フニ梅山ガ此ノ如クナルヲ得ル者ハ是レ平素儉朴自ラ守ルノ致ス所ニシテ且タノ故ヲ以テ踏襲シ得ベキニ非ルナリ梅山ガ養フ所ノモノ亦貴ブベキ所アリ重ンズベキ所アリトウマスベイン氏曰ク人ノ生涯ヲ送ル恰モ數千里外ニ旅行スルガ如シ衣食其他渾テ行旅中能ク耐工得ベキヲ以テ度トス富ヲ得レバ忽チ驕リ貧ニ至レバ號哭スル者必竟生涯三萬六千日ノ行旅中此ノ如クニシテ能ク堪工得ベキヤ



否ヤヲ豫ハ計ラザルニヨルト、梅山能ク此理ヲ知ル者ト  
謂フベシ、今日官途ニ在ル人、累シテ官ヲ休メテ清夢ヲ結  
ブ、梅山ノ如クナルヲ期スルヤ否ヤ、我が知ル所ニ非ズ。

第三十二 木村成壽居ヲ移ス事

木村成壽ハ、茨木縣治ノ南六里、竹原邑ノ人ニシテ、邑ノ著  
姓タリ、頗ル學問ヲ好ミ、汎ク書史ニ通ズ、明治某年、居ヲ其  
宅ノ東ニ移ス、其地爽塏ニシテ、陽ニ面シ、下モニ水田數十  
頃アリ、長林之ヲ遠グル、上膏地沃、景致幽邃、真ニ騷人隱士  
ノ愛玩シテ忘ル、能ハザル所ナリ、人アリ成壽ニ謂テ曰  
ク、子固ヨリ林泉ニ嘯傲スルノ士ニ非ズ、且ツ其故宅ハ、穹  
檐大宇、闐闐ノ衢ニ在リ、何爲レゾ之ヲ去リ、而シテ別ニ新  
居ヲ營ムヤ、成壽曰ク、僕ガ家世田八十石アリ、稼穡ノ利期

スヘキナリ、本邑ノ地、東京往來ノ縣道ニ係ルヲ以テ、風俗  
奢窳之ニ加フルニ、妓婦アリ、絲竹喧嘩ス、僕此間ニ居ル、使  
役スル所ノ僮婢、皆淫靡ニ習レ、敢テカラ南畝ニ竭サズ、故  
ニ居ヲ此ニ遷シ、躬親カラ耕鋤シ、僮僕ヲ淬厲シ、彼ヲシテ  
紛華ヲ慕ハシメザレバ、則チ猗頓ノ富致ス可カラズト、雖  
氏倉穀ノ盈、或ハ期スベキナリト、成壽ノ父信義、潛德アリ、  
行義ヲ以テ郷里ヲ服ス、性施與ヲ好ミ、粟ヲ郷閭單寡ナル  
者ニ貸シテ、其恩ヲ録セズ、尤モ貧ニシテ償フ能ハザル者  
ハ、亦之ヲ責メズ、邑人之ヲ仰グコ、父母ノ如クス、是ヲ以テ  
家贖財無ク、時ニ或ハ之ヲ人ニ乞貸スルニ至ル、足嘗テ門  
ヲ出テズ、暇アレハ、則チ兀坐書ヲ讀ミ、以テ樂ミト為ス、其  
祖信成、亦財ヲ惜マズ、以テ郷人ノ急ヲ濟ヘリト、世人世壽





ガ勉勵彼カ如クナルヲ見相告ゲテ曰ク其父祖ハ畜フル  
所德ニ在テ財ニ在ラズ成壽果シテ素封ヲ致ス所謂陰德  
アル者子孫必ズ興ル者是ナリ而シテ諺ニ云フ其父苦辛  
シ其子逸樂シ其孫乞貸ストハ富ノ恃ム可カラザルヲ言  
フ成壽ハ如キ能ク富ヲ致シ而シテ其家風ヲ墮ス無ク是  
則チ君子富ムテ其德ヲ行フ者其富長ク保ツ可キ也ト  
櫻所子曰ク歐人ノ諺ニ謂ヘルアリ曰ク自由ハ獨逸ノ  
森林ヨリ出ヅト凡ソ人ノ志操氣力也者ハ富貴利達ニ由  
テ消シ窮乏艱難ニ由テ長ズ故ニ田舎ニ在テ有爲ノ志ヲ  
抱ケル壯士モ多年都府ニ住スレバ平素ノ氣力自ラ消耗  
シテ優柔使佞ノ風ニ化スル者ナリ斯弊ヤ上智ト下愚ト  
ヲ除クノ外ハ決シテ免ガルベカラザル者トス試ミニ山

陽頼翁カ前兵兒後兵兒ノ二詩ヲ對較セヨ其情狀一日シ  
テ瞭然タラシ其前兵兒ハ腰間ノ秋水ヲ撫シ人ノ頭ヘニ  
加ヘントスルノ意氣ヲ有シ其後兵兒即チ都門ニ留寓セ  
ル薩兵兒ハ馬ヲ以テ妾ニ換工脾肉ヲ生ゼルニ非ズヤ故  
ニ麗衣鮮食名妓艶妾ハ氣力ヲ斬伐スルノ利斧ニシテ惡  
衣粗食山林田野ハ氣力ヲ培養スルノ肥糞ナリ況ヤ繁盛  
ノ都府鬧熱ノ世界ハ車馬絡繹黃塵天ニ漲リ利名ニ奔競  
シテ其思想ヲ鍛鍊スルニ暇マ無シ田舎ハ間靜ニレテ總  
テ書ヲ讀ミ理ヲ思ヒ術業ヲ修ムルニ宜シ亦其麗華美  
艷羨スベキ者ヲ見サルヲ以テ自ラ勢利ニ奔競スルノ念  
少シ視ヨ古來都會ニハ人材ノ生ズルヲ希ニシテ英傑ノ  
士多ク僻土ニ出ルヲ之ヲ以テ田舎ヲ出デ都府ニ來



往スル者概ネ其黃塵ニ染ミ。人海ニ漂フノ久シキニ至レ  
バ。自然ニ優柔浮薄ニ化レ。所謂江南ノ橘江北ニ移セハ。枳  
穀ニ化スルノ類ナリ。是衣食住居ノ華奢ナルニ至テハ。都  
會固ヨリ田舎ニ勝サルト雖。凡學術技藝ヲ鍛鍊スルハ。田  
舎ニ若カザル所以ナリ。世ノ有爲ノ志ヲ抱クノ士ニシテ。  
都會ノ浮華ヲ慕ヒ。貴重ノ氣カヲ消糜セバ。又一便佞狡猾  
ノ市僧トナランノ。其便佞ノ市僧タランヨリハ。寧口朴  
直ノ儉父タラン。晋ノ陶潛ハ。松菊ノ荒蕪ニ屬スルヲ思フ。  
我ハ氣カノ消耗ヲ懼ルノナリ。殊ニ恠ム。少年書生。學術未  
ダ熟ヒズ。師友猶ホ乏シキニ非ルモ。徒ニ都府ノ浮華ヲ慕  
フガ為メニ。負笈擔簦。鄉關ヲ離レテ都門ニ來リ。其銳意ナ  
ルハ。萬里海ニ航シ。英京佛都ニ留學スルモノアルニ至ル。

而シテ始ノ來ルヤ繁華鬧熱ヲ視テ。心悸シ目眩スルカ如  
ク。而シテ月日ヲ經ルニ隨テ。知ラズ識ラズ。浮華ノ習。履ニ  
染ミ。研學ノ資モ遂ニ聲色ノ爲ニ蕩盡シテ。良師益友ヲ求  
ムルノ力無ク。業ハ半途ニシテ廢棄シ。亦郷里ニ歸ルノ面  
目無ク。都門ニ留ラントスルモ。桂玉ニ窘ムヲ奈何トモシ  
難久平生ノ志操ハ之ガ為ニ屈撓シ。餬口ノ計ヲ得ルヲ以  
テ足レリトシ。或ハ微官ヲ甘ムジテ簿領ニ擬擬シ。或ハ斷  
輿僮僕トナリテ。奔走ニ衣食シ。人生研學ノ好期ヲ空過ス  
ルノ不幸ニ陷ル者。多カラズトセズ。此ノ如キハ。則チ紛華  
ヲ慕フガ爲ニ。生涯ヲ誤ル者ト謂ハザルヲ得ズ。夫レ都門  
ハ。術業老熟ノ士ガ名ヲ成シ身ヲ立ルノ地ト云フベキモ。  
決シテ以年書生ガ業ヲ成スニ適スルノ地ニ非ズ。豈啻ニ



日本立志編卷一終  
僮婢ヲシテ、カヲ南畝ニ盡サレムルノ妨害ナルノミナラ  
ンヤ、成壽其富ヲ保ツノ用意深切ナリト謂フベシ。望ムラ  
クハ後進ノ士、徒ニ都門ノ繁華ヲ慕ヒ、淫靡情欲ノ風、諛佞  
狡獪ノ俗ニ感染セラレ、成壽ノ為メニ笑ハレ、刀勿レ、

日本立志編卷一終

明治十二年十一月十五日版權免許  
同 二十年九月十九日七版御届

著述者

福島縣平民

干河岸貫一

東京府下本所區外手町  
三拾九番地寄留

出版人

大阪府平民

吉岡平助

府下東區備後町四丁目  
三十七番地

出版人

大阪府平民

前川善兵衛

府下東區南久宝寺町  
四丁目八番地



